

第1回 全国川サミット in 庄川町

川は未来に夢運ぶ

報告書

日時 平成4年8月7日(金)・8日(土)

会場 富山県庄川町生涯学習センター

主催 富山県庄川町

後援 建設 砺波市立庄川図書館 川環境管理財団
北陸 富山県河川協会
富山 電力(株)北陸支社



510163777

この報告書は、河川整備基金の助成を受けて作成したものです。

発 刊 に あ た り

「川は未来に夢運ぶ」をテーマに「第1回全国川サミットin庄川町」を本年8月7日・8日の両日富山県庄川町において、一級河川を名にする全国の自治体15市町村及び全国各地より350余名の参加を得、大盛会の内に開催いたしました。

このサミットでは、一級河川を名にする自治体15市町村が一堂に集まり、交流を通して川と流域との関わりや、21世紀に向けてよりよい川との共生について探り、川への理解を深め、啓発普及を図りました。

川は、流域の人々に必要不可欠な水を提供するとともに、舟運漁業の場として、また祭りや遊びの場としても利用されてきました。一方、川は洪水が起こる渡に地域住民に多大な被害をもたらしてきました。

この様に川は流域で生活する人々と一体となり、流域の歴史・文化・風土の形成に大きな役割を果たしてきました。

この報告書は、建設省河川局長岩井國臣氏の記念講演及び15市町村代表者による川と暮らしのシンポジウム、田辺チビ鶴氏による講談等を収録したものであります。

最後にこのシンポジウムにご協力をいただきました関係各位に深謝するとともに、今後のご支援、ご協力をお願い申し上げる次第でございます。

平成4年11月

第1回全国川サミットin庄川町

富山県庄川町長 村・井 武 一

INDEX (目次)

1. 第1回全国川サミット日程	1
2. 主催者代表挨拶	2
富山県庄川町長 村井 武一	
3. 来賓祝辞	3
北陸地方建設局長 酒井 孝氏	
富山県知事 中沖 豊氏	4
衆議院議員 綿貫 民輔氏	5
4. 記念講演「ロマンある地域づくりをめざして」	
建設省河川局長 岩井 國臣氏	6
5. 川とくらしのシンポジウム	
— 15市町村の意見発表 —	15
資料編	
1. 記念講談	
「巴川物語」	
講談師 田辺チビ鶴氏	41
2. 「第1回全国川サミット宣言」宣言文	50
3. 第1回全国川サミット in 庄川町現地視察コース	51
4. 写真で綴る第1回全国川サミット in 庄川町	52
5. 第1回全国川サミット参加15市町内位置図	54

第1回全国川サミット in 庄川町日程

8月7日(金)

<第1部>

■ 庄川水系現地視察

庄川水系上流、利賀村世界そば博第1会場、
平村相倉合掌集落

8月8日(土)

<第2部>

■ 意見交換会

会場 庄川町生涯学習センター
建設省・富山県・15市町村

<第3部>

■ 主催者挨拶

富山県庄川町長 村井 武一

■ 来賓挨拶

北陸地方建設局長 酒井 孝氏

富山県知事 中沖 豊氏

衆議院議員 綿貫 民輔氏

■ 記念講演「ロマンある地域づくりをめざして」

建設省河川局長 岩井 國臣氏

(休 憩)

■ 15市町村紹介 ビデオで紹介

■ 川とくらしのシンポジウム

<コーディネーター> 早稲田大学教授 宮口 侗迪氏

<パネリスト> 15市町村代表者

■ 記念講談

講 談 師 田辺チビ鶴氏

■ サミット宣言

富山県庄川町長 村井 武一

<第4部>

■ 記念植樹

会場 庄川町水記念公園

■ 交流パーティー

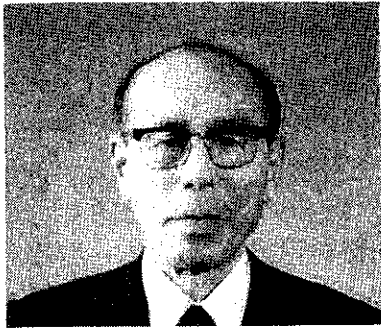
会場 庄川温泉観光ホテル

■ 水上コンサート

会場 庄川町水記念公園

(イルミネーション&レーザーショー)

主催者挨拶



富山県庄川町長 村井 武一

ただ今ご紹介いただきました地元庄川町長の村井であります。

開会と歓迎のご挨拶を一言申し上げます。

本日は、皆様方のご賛同を賜りまして、第1回全国川サミットを計画いたしましたところ、公務極めてご多忙中にもかかわらず、中沖富山県知事殿、岩井建設省河川局長殿、酒井北陸地方建設局長殿をはじめ、北は北海道、南は四国までの一級河川名を自治体の名前にしている15市町村長外、関係する皆様が、かくも多数御来会され、川とのかかわりについて、語り合えることは本当に嬉しく、私の最も喜びとするところであり、ご参会を賜りました皆様に、満腔の敬意と感謝を申し上げる次第であります。

尚、川とのかかわり方につきましては、全く同じというところはないと思いますが、本日お集りをいただきました、15市町村のご意見や実例を参考とし、理想的な川とのかかわりを見だし、明日への施策のかてに致したいと考えて、皆様方にお呼びかけした次第であります。

本日のサミットが成功裡に終え、又、このサミットがいつまでもいつまでも永く続くよう、皆様方のご協力を特にお願い申し上げます。

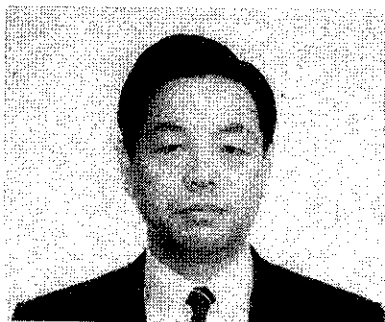
最後になりましたけれども、本日は川サミット開催に関し、ご協力、ご指導賜りました富山県、建設省、富山・水・文化の財団、河川環境管理財団、北陸建設弘済会、関西電力(株)北陸支社に対し、衷心より厚くお礼申し上げます。

尚、今回の全国川サミットは、河川整備基金の助成を受けて、実施したものであります。

関係各方面に対し、重ねてお礼を申し上げまして、開会と歓迎のご挨拶に変えさせていただきます。

本当に有難うございました。

来賓挨拶



建設省北陸地方建設局長

酒井 孝 氏

全国川サミットの開催にあたりまして、一言御挨拶を申し上げます。

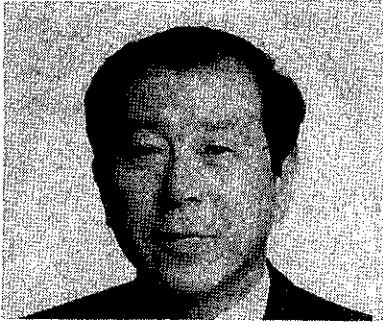
川は「母なる川」という例えがありますように、その川が流れている地域の歴史、文化、風土の形成に大きく関わっているものであります。日本全国には、約三万本の川がありますが、そのひとつひとつが様々な個性をもっております。このような川の持っている個性豊かな資質を活かして、魅力と活力のある個性的な地域づくりを進めていくことは、これからの時代には非常に重要なことではないかと考えます。

平成2年の国勢調査結果によりますと、年平均の人口増加率は0.6%で、10年前に比較して3分の2以下に低下しておりますし、女性1人当たりの出生率も戦後最低の1.53人となっていることから、今後、東京等の一部地域を除いて人口の伸びは、期待できない状況であります。

一方で、人々のゆとりや豊かさへの志向の高まり、自然への回帰志向の高まりは、ますます大きなものとなってきております。このような時代の中では、地域に密着した川を活用して、地域の活力の向上を図りながら、そこに住む人が誇りを持てるようなやすらぎとうるおいに満ちた地域づくりを進めることが重要であります。

今回、この全国川サミットに御参加の15市町村は、様々な面で川との結びつきが深い地域でありますとともに、その地域のシンボルとなっている川を活用して、新しい時代に即応した個性ある地域づくりをされている全国の模範であります。庄川町で第1回の全国川サミットが開催され、その成果が全国にPRされますことは、川を活用した地域づくりを全国に広めていく良い機会であります。

地域づくりの根幹となる事業を担当しております建設省におきましても、本年は第8次治水事業5箇年計画の初年度にあたりますことから、その基本方針であります「安全な社会基盤の形成」、「水と緑豊かな生活環境の創造」、「超過洪水、異常濁水等に備える危機管理施策の展開」の三つの柱に基づきまして、新しい時代の要請に対応しつつ、活力ある個性豊かな地域をめざした治水事業を推進するとともに、桜づつみモデル事業、ふるさとの川モデル事業、多自然型川づくり、ラブリバー制度などの地域支援型の事業を活用いたしまして、川を活かした地域づくりを積極的に支援していきたいと考えております。本日の川サミットでの議論等を通じて、地域が自ら考え、自ら実行するふるさとづくりが今後ますます展開されますことを期待いたしまして、簡単ではございますが挨拶とさせていただきます。



富山県知事

中 沖 豊 氏

庄川峡の清流が夏の日差しをやわらげてくれているようでありますが、本日、岩井河川局長さんをはじめ多くのご来賓の皆様方をお迎えになり、第1回の「全国川サミット」がこのように盛大に開催されますことは、誠に喜ばしい限りであり、心からお祝いを申し上げます。また、全国15の市町村長の皆様並びに関係の皆様方には、ようこそ富山県へお越し下さいました。富山県民を代表して心から歓迎申し上げます。

川は、古くから豊かな自然を育み、人々に大きな恵みをもたらしてまいりましたが、時には、流域に住む人々の生命や財産に甚大な被害をもたらしてまいりました。

富山県は、「越中百里山河壮なり」と詠まれるように大小300余の河川が動脈のように流れる「水の王国」であります。一昔前までは、3,000m級の山々に源を発する急峻な河川の氾濫に悩まされてまいりましたが、私達の先人は、不屈の精神と英知を結集し、急流河川にダムを造り水を治め、豊富な水力発電を興し、産業を発展させてまいりました。

また、先日発表されました全国の一級河川水質調査では、当地を流れる庄川が黒部川とともに全国第5位にランクされるなど、北アルプスの豊富な雪解け水による富山の清流は、キトキトの魚やおいしい米を生み、そして産業、文化の発展に大きな役割を果たすなど、今や富山県民にとってかけがえのない財産となっております。

この県民共有の大切な財産を次の世代に引き継いでいくため、富山県では、いま、河川の治水機能の維持、向上を図りながら、やすらぎとうるおいのある水辺空間を創造し魅力ある郷土づくりを進めていくうえでの指針として「とやま21世紀水ビジョン」を策定し、水に関わる各種施策を総合的、計画的に進めているところであります。

こうしたなか、川と、ひときわ深い関わりのある市町村長の皆様方が一堂に会され、「川は未来に夢運ぶ」をメインテーマに、川とのよりよい共生を図りながら、21世紀に向けた、個性豊かで活力ある地域づくりについて討議され、その成果を全国に向けて発信されますことは、誠に意義深いことであり、全国で初めてのこの川サミットが大きな成果を収められますよう心から念願して止みません。

さて、富山県ではいま、第1回「ジャパンエキスポ富山'92」を開催いたしております。この博覧会は（「人間—その内と外 富山から世界へ・未来へ」をテーマに）新しい時代の人間の生き方や地域のあり方を提唱する、まさに「いのちとくらしの博覧会」であります。皆様方には是非、エキスポとやま博へご来場いただき、富山県を大いに実感していただければ、誠に幸いに存じます。

終わりに、川サミットの大成功を心からお祈り申し上げますとともに、町制40周年を迎えられました庄川町をはじめ、関係市町村の限りないご発展と、ご臨席の皆様方のますますのご健勝、ご活躍そしてご多幸を祈念いたしましてお祝いのことばといたします。

メ ッ セ ー ジ

衆議院議員

綿 貫 民 輔 氏

第1回全国川サミットが庄川町で開催されますことを心からお祝い申し上げます。

私は、庄川町の隣の井波町で生まれ育ち、庄川の水の生湯につかり、庄川の水で生活し、また、庄川で泳いだり魚をつったりした少年時代を思い浮かべています。

庄川は時として、暴れ氾濫し、大きな被害を住民にもたらしましたが、先人の治水の努力によりまして今日の安定した川となりました庄川の清き流れは私のふるさとの宝として生涯心の中に生き続けることと思います。

これからの時代は、潤いと安らぎに満ち、人々の心が豊かになる町づくり、地域づくりが大切であります。

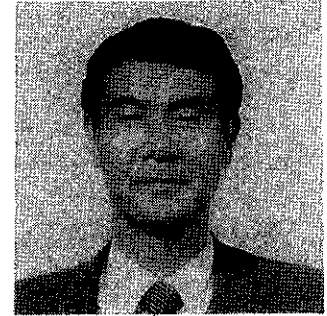
川は人々の心のふるさとです。この様な川を町のシンボルとして、地域づくりを進めていくことを私は大いに支援していきたいと考えております。

今回の全国川サミットが盛大に開催され、参加市町村が川を生かした町づくり、地域づくりが益々進みますよう祈念いたしましてご挨拶とします。

演題「ロマンある地域づくりを目指して」

講師 建設省河川局長 岩井 國臣 氏

昭和13年生まれ、京都大学大学院修了
昭和37年建設省入省、建設省大臣官房技術調査室長、
九州地方建設局河川部長、河川局河川計画課長、中
国地方建設局長等を経て、平成4年6月より河川局
長、福岡県出身



ご紹介いただきました河川局長の岩井でございます。

今日は「ロマンある地域づくりをめざして」というテーマで、日頃考えていますことを少しお話しさせていただきたいと思います。今日、実は、こちらにまいりまして、地元の方から少し現状をご案内いただいたり、この近辺のお話を聞いておりまして、大変この地は、私が今日お話ししようとする「ロマンある地域づくり」を、もうすでにこの地でやっておられるのではないかと、そんな気がしてちょっとしゃべりにくいと思っているようなことでございます。

利賀村の利賀フェスティバル、これは世界演劇祭ということで、もうすでに10年を過ぎているということで、これは素晴らしいことだと思うのです。全国をみましても、このような形のフェスティバルをやっておられるところというのは、それほどございません。

それから、この庄川町におきましても、先ほどこちらの方にご案内いただきましたけれど、素晴らしい水記念公園、規模はそれほど大規模ではないかも知れませんが、きらりと光る素晴らしい水の記念館もできておりますし、周辺の公園も実に素晴らしい。また、隣接して庄川美術館、ちょうどご当地ご出身の藤森先生の展覧会がやられておりましたけれども、この記念美術館も素晴らしいですね。全国に比べましても決して恥ずかしくない素晴らしい美術館だと思います。それよりなによりも、町長さんはじめ、この町の方が水をテーマに、全町が水の公園だというふうな考え方で、もうすでに取り組んでおられるということなど、これはまさにロマンある地域づくりを現にやっておられるということだろうと思います。

そんなことで、こういった先進的な地域で、いまさらロマンということで私からお話するのはちょっと気がひけるわけですが、せっかくの機会でございますので日頃思っておりますことをお話しさせていただきたいと思います。

ご案内の通り、現在、昭和が終わり平成に入っております。ご案内の通り、平成という言葉の意味でございますけれども、「うち平かに行う、地平かに天成る」というのが、平成という言葉の意味だそうでございますけれど、うち平かであるためには、やはり日本の伝統文化といったものを大事にしながら、しかも平かな時代ですから、具体的に感覚を持ちながらさまざまな改革を成していかなければならんと、そんなふうに思います。

最近では政治改革ということが盛んにいわれておりますけれども、国民の一般的な感じからすると、やはり政治にロマンがない。私ども行政ですけど、おそらく行政にも国民の目から見ればロマンという物が感じられない。あるいは我々国民の生活におきましても、ロマンという物が感じられない。そんなことだろうと思います。そういったことで、政治という世界におきましても、あるいは行政という世界におきましても、あるいは我々の生活自体におきましても、ライフスタイルというか、そういった面におきましても、やはり改革が必要であるところなふうに思います。

平成という時代は、積極果敢に改革を行ってロマンを求めていく、そんな時代ではないか。わが国の伝統文化に根ざしつつも、やはり国際的視野に立ちまして、高い理想を掲げてさまざまな改革を行っていく。それがロマンということではなかろうか。そんなふうに実は思うわけでありませう。

そういうことで、私といたしましては、平成という時代を生きる生き方といたしまして、「日本の伝統文化」、「国際的視野」、そして「ロマン」、この3つの言葉をキーワードとして重要視したいと、こんなふうに実は思っているわけでありませう。

さて、ご案内の通り、世界は非常に大きく変わっております。まさかと思ったことが次々に起こってきて、まさに激動の時代に入っているわけだ。

まさかベルリンの壁が壊れるなどとは思っていなかったですね。ソビエト連邦という国が崩壊するなんてということなんか誰も思ってなかったですね。しかし、現実にはそういうことが今起こって、世界はまさに激動の時代に入っているわけだ。そういうことで、やはり国際的視野に立ってといいますか、グローバルに考えて、やはり世界が今後どのようなようになっていくのかというふうなことを当然考えざるを得ないわけだ。我々の内政といいますか、国の中のことをいろいろ考え、いろいろやっていく上に対して、やはり、世界はどうなっていくのかというようなことは当然考えなければならぬわけだ。

私、学生時代、山登りを高校時代、大学、あるいは大学院を通じまして、盛んに山登りをやっていた。ひどいときは1年365日あるんですけど、120日くらいは山へ行っていたということで、この立山、剣にも随分登った経験がございますが、私どもの山岳部の先輩

に今西錦司という方がおられます。ついこないだ亡くなりましたんですけども、今西錦司がですね、ご案内の通り、「棲み分け論」、今西進化論といいますか、今西さんの「棲み分け論」というのがございます。進化論といいますと、ダーウィンの進化論というのが有名ですね。およそ一般的には進化論といえばダーウィンの進化論をさすというくらいになっておりますけども、今西さんは「あれ、ちょっとおかしいのではないか」、「ダーウィンの進化論というのはおかしい」こういっておられるわけですね。例えばですね、今西さんの「棲み分け論」とはどういうことかといいますと、蛇は蛙をのみますね、これはもう強い動物は弱い動物を食料として食うと。あるいは、自己防衛上やつけるということはあるんですね。ターウィンというのは弱肉強食、適者生存、皆さんご案内の通りですけども、確かに蛇は蛙を食うのですね。ですけど、今西さんは種のレベルで考えると、このレベルでは確かに蛇は蛙を食う。だけど、種というレベルで宇宙全体で考えると、「蛇という種は蛙という種を決して滅ぼしていない。蛙も蛇も共にこの世を生きとるじゃないか。共存してとるではないか。」、こう言われるんです。これが「棲み分け論」です。そして、さらに今西錦司は、「ダーウィンの進化論というのは間違いなくマルサスの人口論の影響を受けている。西洋の伝統的な強いものが勝つ、神に選ばれたもののみが幸いであるという、そういう西洋の伝統的な思想に基づいたものである。」というようなことを今西さんは言われるわけでありませう。

さらに、今西さんは私の山岳部の先輩なものでありますから、私の尊敬する最大の偉大な先生であるわけですが、もうひとり、ご存知かも知れませんが、哲学者で梅原猛さんという方がおられます。この方も大変尊敬をしているわけですけども、梅原猛さんは、こう言われるのです。

「これからの世界は強いものが勝つという伝統的なヨーロッパの思想ではもはややっていけないのではないか」。おそらく、その内、もうそういうことが非常に大きな課題になっていると言え言えると思えますけれども、やはり世界におきまして南北問題があります。「伝統的な西洋の文明文化、西洋の方ではもはやこれからの21世紀という世界はやっていけないのではないか」、こう言われるわけです。

おそらく、西洋文明と東洋文明の混合の中から新しい第3の文明というものがこれから生まれてこなければならん。そうでなくては世界はやっていけない」東洋文明じゃないんです。必ずしも東洋文明がいいということではもちろんないわけです。「西洋文明と東洋文明の混合の中から、融合の中からなにか新しい第3の文明というものが出てこない」と世界はやっていけないのではないか。日本がその役割を果たすのではないか。西洋文明の

取り入れに成功し、しかも日本のいろんな伝統文化が残っている、そういう国であるわけですけれども、そういう日本がこれから第3の文明というものを作るにあたって、大きな役割を果たす時期ではないか。時期ではないかというより、むしろそういう時期が到来した。」と、こういうふうにおっしゃるわけであります。

ご承知の通り、ニューヨークの自由の女神、あれはフランス革命100年記念として、フランスがアメリカにプロポーズをいたしましてできた世界の大モニュメントであります。

ベルリンの壁以来、東欧社会あるいはソビエト連邦等々のいろんな動きを見ておきますと、「この20世紀という世紀はまさに自由の世紀である。自由の女神の勝利に終わろうとしている。」それは間違いがないのだろうと思います。しかし21世紀という世紀は引き続きその自由の女神が微笑み続けるのかどうか。そこがやはり問題であります。

実はフランス革命200周年記念、200年記念でフランスが日本に今プロポーズしているわけです。平成10年、明石・鳴門ルートが完成いたします。平成10年、最大の明石架橋ができるわけでございますけれど、それを機に淡路島に自由の女神に代わる大モニュメントを作ろうという動きが今始まっております。明石架橋は本四公団、建設省の所管の事業で結ばれますから、モニュメントの建設につきましては、今後それなりに建設省も力を貸していかなければならないのだろうとは思いますが……。

それはさておき、そういうモニュメントが、淡路島にできるとそのテーマは「コミュニケーション」ということになりそうです。コミュニケーション、どうも20世紀が自由の世紀であるとすれば、21世紀はどうもコミュニケーションの時代ではなかろうか、コミュニケーションというのは言葉が違う、あるいは思想が違う、宗教も違う、あるいは国力が違う、そういうもの同士がどうコミュニケーションをしていくのかということが非常に大事になるわけです。

そういうことで21世紀はコミュニケーションの時代ではないか、というふうなことのようです。

それから先ほどいいました梅原猛さんは、「おそらく21世紀の第3の文明の原理というものは循環と共生だ」とこういうふうに言いました。平和の原理、慈悲の原理という言葉も使われますけれども、「第3の文明の原理、これからの第3の文明の原理というものは循環と共生」とこうおっしゃっておられます。先ほど司会の方からも共生という言葉が出ておりましたけれども最近盛んにいわれております共生ということがどうもそういうことが21世紀の思想、哲学になるようであります。

それからもう一人明治大学に、これも哲学者で、最近非常にご活躍でございます中村雄

次郎教授がおられます。その方は「21世紀というのはリズムの時代」、これがなかなかちょっと難しく説明しにくいのですけれどもコミュニケーションということを考えてときにどうも言葉ではないのですね。例えば、親子のコミュニケーションを考えてときに親と子が会話しますよね。会話も大事なんですが、どうも親と子の会話というのは教育的な意味あいになって、本当の意味のコミュニケーションにならない場合も多いのではないかと。

私は常々思うのですけれども、子どもを育てる時にですね、私ども男の場合ですと、子どもに対して背中ではしゃぐというようなこともちょっと必要だろうと思うのですがやはり、何というのですかコミュニケーションというか、なにか議論をする時に理屈でもって相手を説得するとかというのではなくて気が合うとかバイオリズムとかそういうものがどうもあるかもしれない。そんな気がしているのですけど、そういったことも含めて中村先生は「21世紀はリズムの時代だ」と、こんなふうに言うておられるのですけどこれもやはりコミュニケーションですね。結局コミュニケーションということだろうと思います。

これからはコミュニケーションとか連携とか、交流とかそういったことがいろんなレベルで、大は国のレベルで、小は近所づきあいから親子のコミュニケーション、夫婦間のコミュニケーション、そういったところまで含めて非常に大事になってくるのではないかと。こんなふうには実は思うわけです。

それで「ロマンある地域づくり」になるわけですがここで少し、まず、「ロマンある地域づくり」の私流の定義をちょっとしておきたいとします。先ほど冒頭に平成という時代の生き方というものを申しました。そして、「日本の伝統文化」と「国際的視野」ということと「ロマン」、この3つのキーワードを申しあげました。そしてそのあと、コミュニケーション、共生とコミュニケーションのことを今申しあげたわけですが、ロマンある地域づくりとはその地域の当然自然的条件があります。その地域の自然的条件、歴史、文化に根ざした、やはり当然個性ある地域づくりでなければならぬ。その地域の自然的条件、歴史、文化的条件に根ざした個性ある地域づくり。

もう一つ大事なことは、さらに人間の感受性の深層部分をふるわすような、中味の濃いとか、質的に高いとか、そういうことが必要でありまして、今日、庄川町の水記念公園を見させていただいて何か感じるものがありました。私の深辺に触れるものが、きらりと光るものが、そういうその感受性の深層部分を震わすような気配りというものがないとダメなわけですね。それが2つめ、ロマンある地域づくりですね。

3つめが共生という思想に基づきまして、交流とか連携とかあるいはコミュニケーションというものを大事にした地域づくりでなければならぬとこう思うように思います。

先ほど司会の方から共生という言葉も出ましたし、それからイベントという言葉も先ほどから出たと思うのですが、最近いろんな形のイベントが行われていますね。先ほど知事さんが言われましたエキスポ富山というのも一つの大きなイベントでございますし、イベントというのはただ単に人を集めればよいということではなくて、そこにやはり交流とコミュニケーションというものがなければならぬ。今、バルセロナのオリンピックをやっておりますけれども、あれもひとつのやっぱり交流なんですね。様々な交流の仕方というものがあろうかと思っておりますけれども、やはり町づくりレベルにおきましても、交流ということが大事になってくるはずであります。

あるいはまた、地域活性化ということを考えたときに、都市と農山村との交流がないと多分うまくいかないのではないかと私予感をしておるわけです。もちろん、農業、林業は大事であります。さらにこれからは、例えば農山村地域の活性化ということを考えたときに、あるいは農山村地域の町づくりというものを考えたときに、やはり都市と農山村との交流ということが必要になってくると思います。それから、また今日のこの川サミットのようないくつかの仲間との連携ということも大事になってくると思います。

ところで、連携というのは何故必要か、哲学的な意味でございますが、連携とは自分を壊して新しい自分を作るというところに哲学的な意味があるんだ、既存のものを壊し新たな価値あるものを生み出す、そこに連携の哲学的意味がある。そういうことになりますと当然お互い一方通行ではだめなんですね。相手にやはり何らかの刺激を与えたり、影響を与えなければならぬ。それがないと既存のものを壊し、新しいものを育てていくということにはなりませんから。そうなってくると、やはり個性的でなくてはならない。それぞれが同じ同質なものが連携するという意味あいはいはあまりない。異質なるゆえに連携に意味があるわけです。異質なるものがぶつかることによって、交流することによって、お互い刺激しあい、自分のものを壊して新しいより価値の高いものを生み出すということになるわけですから、連携という言葉の中にもうすでに個性化という言葉が入っておるはずであります。

それからまた、ある人は、「個性化の意味でございますけれども、個性化とは共に共生する道を求めることだ。」と、こういっておられる方がおられます。そうしますと、個性化という中にすでに共生とか、連携とかそういうものを含んでいるということになると思います。

連携、しかもすでに個性化であるし、個性化というときにはそれはすでに連携を前提にしている。こんなふうになるかと思っておりますが、そういう観点で、それぞれの地域が、あ

るいはそれぞれの人々が、既存のものを壊し、何かより新しい価値のあるものを作り出していき、変わっていく、そのためにはどうしても連携というものが必要である。そこに、やはり本日の川サミットという意味もあるのではないかと。こんなふうに思うわけでありませう。

今回は、第1回ということでもありますので、是非、これを重ねていただきまして、第10回、第20回、第30回というふうに、そして、それぞれの地域が川をテーマにして、ロマンある地域づくりに変身していく、それを本当にここから願っているわけでもあります。

大変抽象的な話ばかりいたしました、最後に、ロマンある地域づくり、いろいろ課題があると思いますが、一つだけ申し上げておきたいと思います。川のことにつきましては、私の専門みたいなことですが、今日はあえて川の話はしないで地域づくりの話をしていただいているわけですが、今日誰かからの話にあったと思いますけども、地元からの発想というのが非常に大事でございます。地域と今我々の方とがいかに連携するか、そして、一体になるかということが大事でございます。それよりももっと実質的に地元の方から、地元の日々の生活の中で、あるいは地域づくり、地域活動の中から考えて、かくあるべきだという川の事情というようなものは、それぞれの地域の川の依存というものは地域からでてくるというのが基本でないかなとそんなふうに思うもんですから、あえて川の話は差し控えているわけでもあります。

最後に地域づくりにつきまして、ひとつ、是非こういった観点で進めていただきたい。これも実はこの庄川町でやっておられますのでちょっといまさらという感じがするわけですが。

ご承知の方も多いかと思いますが、ドイツに「美しきわが村運動」、わが村を美しくという運動が、大体30年くらい前から非常に行われているわけでもあります。これもいろいろ当時、当然社会的背景があったようでもあります。現在はヨーロッパ、ECということになっておりますが、その前がEECという時代があったのです。やはり、自由化というものが大きくクローズアップされてきている農山村地域がこれは大変ではないかということで、農産物の自由化は自由化として、いかに農山村地域が活性化するかということで相当議論があって、「美しきわが村運動」というのが始められたそうでもあります。

私自身はまだドイツへ行っておりませんので、いろんな話、人の話、あるいは書いたもの等を見て感じるわけですが、やはり、この様な運動をわが国においても直ちに始めなければならないのではないかと、こんなふうに思います。やはり都市と農山村地域との交流を深めるためには、例えばこの様な「美しきわが村運動」のような感受性の深

層部分を震わすような気配りが必要であると、こんなふうに思います。

大規模なリゾート開発は全国的にいろいろ進んでもいるし、また問題もあるようでもありますけども、間違いなく休暇というのが増えます。労働時間は1,800時間と盛んにいわれるような時代でありますし、我々ももうすでに週休2日制になっているのですし、しかも年次休暇もどんどん取れという時代になってきているわけですから、間違いなくわが国における休暇、自由時間というのが増えてまいります。

そういうことで、今行われているような大規模なリゾート開発ということも必要だろうと思いますが、私自身はあえて否定もしませんけども、しかしやはりもっとファミリーな低料金で気軽に行える。いくなれば農村型のリゾートとでもいいますか、そういったものがこれから必要ではないか。そういうことで、都市の人々は農山村地域に出かける。それがまた都市と農山村との交流ということで、いろんなビジネスチャンスが生まれてきて、農山村地域の活性化にもつながっていく。そういたしますと、農山村地域に数日滞在すると日帰りじゃダメ、1泊、2泊じゃなくて数日滞在するというためにはトイレはやはり水洗に変えなければならないだろうし、いろんな施設がいるんだろうと思いますね。そういうことを積極的にやりながら、地域全体をこの庄川町が町全体をひとつの水の公園、全町水公園という形でやっておられるのと同じような形で、地域が、全地域公園だというふうな考え方で「美しきわが村運動」、そういうようなものを進めていく必要があるのではなかろうか、そんなふうに思うわけであります。そういうときに、やはり私は一番大事になってくるのは、もちろん山も大事でございますけれども、川ではないかとこんなふうに思います。

それから今、地球サミット等で環境問題というのが非常に大きくクローズアップされてきておりますけれども、これからの国づくり、これからの地域づくりにおきまして、先ほど梅原さんの循環と共生ということを申し上げましたけれども、循環とかりサイクルとか非常に大事なわけですが、循環ということ考えたときにやはり、水というものが一つの大きな切り口になると思います。山に雨が降ります。そして、谷川を流れて川に来て、川を流れて、海に至るわけです。そしてまた蒸発して、こう、まさに循環を繰り返しているわけですね。梅原さんはまさに森そのものも循環だろう。宇宙そのものも循環かもしれませんけれども循環ということを考え循環というものを大事にした自己行動、地域行動、あるいは生活のあり方というようなことをいわれるわけでございますけども。そういうことを考えたときに、水の存在というものが非常に大事ではないか、これからの国土づくり、あるいは地域づくりにおいて、「水」というものがひとつの大きなキーワードになってく

るのではないか、こんな感じがいたしております。

本日、第1回ということで、これからスタートいたしますこの川サミットに寄せる私の期待というものも非常に大きいわけであります。

このサミットがますます発展しますことを最後に祈念申しあげまして、私の話を終わらせていただきたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

シンポジウム

川とくらしのシンポジウム



■ コーディネーター

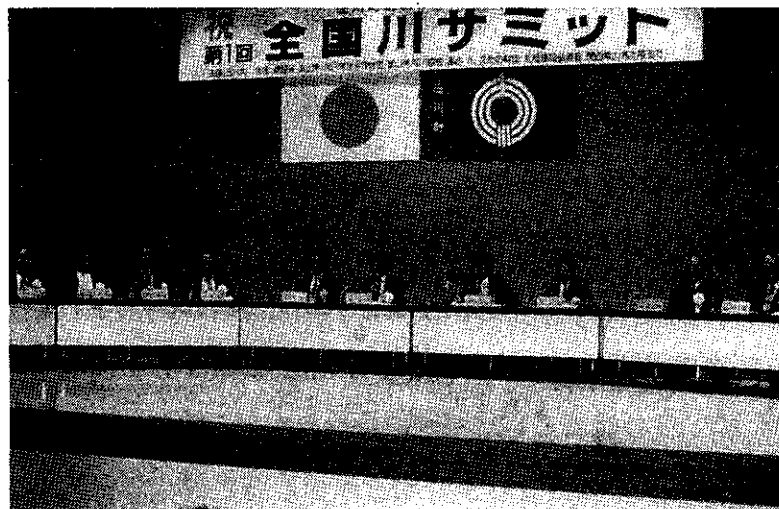
早稲田大学教授 宮口 侗迪 氏

昭和21年生まれ、東京大学大学院博士課程修了、早稲田大学教育学部助教授等を経て昭和60年より早稲田大学教育学部教授、文学博士、国土審議会専門委員、(財)富山・水・文化の財団理事、専門は文化社会地理学で、日本の基層文化がいかに水存在を前提にしているか、富山県がその典型的な例であるという、富山県出身

■ パネリスト (敬称略)

全国15市町村代表者

北海道	鶴川町 長	大内 良一
秋田県	雄物川町 助役	小西 晋吉
新潟県	荒川町 長	金子 好
埼玉県	荒川村 助役	磯田 利平
静岡県	富士川町 助役	望月 文夫
静岡県	大井川町企画財政課長	鈴木 孝治
静岡県	菊川町 長	白松 太喜夫
富山県	庄川町 長	村井 武一
愛知県	豊川市建設部長	夏目 國重
愛知県	木曾川町 長	今井 嘉文
三重県	宮川村 長	山本 泰助
兵庫県	加古川市 助役	野村 昇之
兵庫県	揖保川町 長	八木 捷
徳島県	那賀川町 助役	福島 聡
愛媛県	肱川町 長	大野 和



宮口教授 本日の協賛団体であります富山・水・文化の財団の理事を仰せつかっております関係上、今日このシンポジウムのコーディネーターを仰せつかりました。

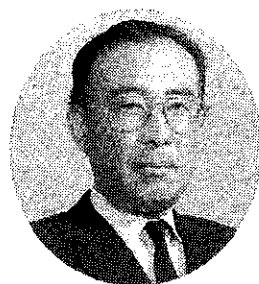
先ほどからの来賓の祝辞や、あるいは建設省河川局長さんの講演にも何回も交流ということの意義、あるいは河川というものがわが国の生活に持ってきた大きな意義について、既に多く語られております。

本日はそういうことで、私から改めてそのようなことを申し上げることはとりあえずカットさせていただきまして、ともかく現代の日本が高度成長を経て、いわば地域社会のあり方が問われている時代であるということだけ申し上げておきたいと思っております。

経済というものは放っておいてもどんどん先へ進んでいってしまうものでありますけれども、地域社会をどう維持、あるいはどういうふうに変えていくかということは、かなり意図的に勉強しながら進めませんと中々難しい問題であろうかと思っております。

本日はここに河川の名を冠する市町村、すなわち川というものを基盤としておられる市町村の首長の方々がお集まりになって、そして、そういう基盤に基づいて新しく影響し合う、学び合う会を始められたということでございます。これから市町村長方にそれぞれの市町村におけます川、水を活かした地域への取り組みにつきましてお話しただこうと思うわけですが、何分にも与えられております時間が1時間半程度でございます。日頃行政を預かっておられます方々ですので持論も沢山持っていらっしゃるはずですが、そこをぐっとこらえていただきまして、4分間程度を目安に一通り日頃やっておられますことにつきましてお話をいただきたいというふうに考えております。その後の時間の具合で最後のまとめについては考えさせていただきたいというふうに思っております。

それでは、北海道の鶴川町さんよりお願いいたします。



＜北海道むかわちょう鶴川町 町長 大内 良一＞

北海道の鶴川町でございますが、ご案内の通り、北海道は開拓されて約130年、私どもの町は隣に苫小牧市があるわけでございますが、苫小牧市から分村いたしまして、ちょうど平成7年で100年になるわけでございます。

私どもの鶴川は日高山脈に源流をもっております。それが太平洋に注ぐ、河口に、わが

町が形成されているところでございます。鵠川は北海道では5番目の長い河川といわれております。その河川の流域には2町1村が関わっておりまして、最上流部では今、ビデオにも出ておりましたが、トマムというところがございます、全国で3番目位のきれいな川といわれていたわけでございますが、今年の発表では少しランクが下がっているようでございます。そういうことで、非常に開発が進められようとしている地域でございます。

この鵠川の水を利用しまして、中流、下流では水田を中心とする農業地帯となっております。鵠川町は北海道でも南部に位置することから、比較的温暖な気候条件にあります。また、豊富な水を湛える鵠川によりまして、早くから稲作に取り組みをしております。そういうことで、本町で今年で水稲が作られましてからちょうど100年目を迎えるわけでございますが、現在は約3,000haの水田地帯となっております。早くから、農業利水事業、圃場整備事業が進められてきておりまして、整備率も90%となっているところでございます。

しかし、現在は減反政策によりまして、やはり5割程度の水田が減反になっているのが現状でございます。複合経営が今日の課題となっております、これらを今進めているところでございます。複合経営の主なものとしたしましては、野菜、花づくり、特にリシアンサスという花を私どもが今、重点的に作っております。野菜はほうれん草と馬鈴薯が主体でございます。ほうれん草などは関西市場では高い評価を得ているところでございます。

その他、日高地方の入り口になりますので、競争馬の生産頭数が非常に多く、約1,000頭近く競争馬が生産されており私どもの町の産業というのも一つの特徴ではなかろうかと思っております。

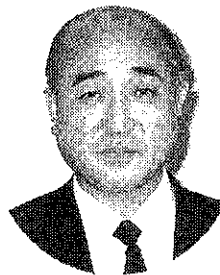
また、河口にあることから漁業も本町の産業の重要な部分を占めているわけございまして、この鵠川を遡上するサケ、ししゃもの産卵のための河川ともなっているわけでございます。また、鵠川からもたらされます栄養分が海水に混じることによりまして、河口付近などプランクトンが非常に発生しているということで、近年はホタテの直播きによる増殖事業、それからホッキ貝等の漁業も大きな目玉になっているところでございまして、これらの生産が年々上がっているところでございます。

また、河口部に位置することから、広い河川敷き、緑地があるわけでございます。従いまして、高水敷を利用いたしました公園づくりを進めているところでございまして、国の河川環境整備事業と連携しながらレクリエーションゾーンとしての整備を進めております。特に、たんぼぼ公園という名称で約10haに広がるたんぼぼ群生地が5月の下旬になりますと、黄色のじゅうたんを一面に敷きつめる景観となっております、私どもでは日本一

のたんぼぼ群生地として自認しているところでございます。鶴川町は名前のごとく一級河川鶴川と深い関わりがあることから、「ししゃもとたんぼぼの町」として川にこだわりをもった町づくりを進めているところでありまして、今後とも15市町村の事例に学びながら、一層私どもの町の発展を目指して考えてまいりたいと思っております。

なお、今日は庄川町の皆さんにお世話になっているわけですが、庄川町の方々もたくさん見えているはずでございますが、私どもの町に明治・大正時代の王子製紙に鶴川はじめ隣の一級河川の沙流川、これらにかかわりまして森林の木材を流送する人夫の方の頭として、この庄川町から沢山の方々が私どもの町に入っているところでございまして、現在も私どもの町にその子孫の方がお住まいになっておられます。そのご縁もございまして、私どもも非常に今回の第1回サミットはなにかの縁ではなかろうかとこのように非常に感銘しているところでございます。

宮口教授 色々多面に渡ってお話をいただきましてありがとうございました。



＜秋田^{おものがわまち}県雄物川町 助役 小西 晋吉＞

秋田県の雄物川町でございます。今皆さんにお返ししています7ページに町の紹介がございます。また、詳しい状況につきましては先ほどのビデオでご紹介申し上げましたので、その分は割愛させていただきます。

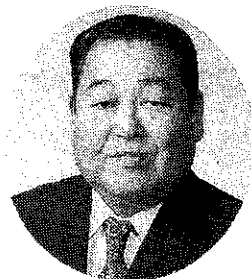
現在、私の方では雄物川の川と親水をするということを目的にしまして、花火大会を行っております。今年で23回になり、ジャンボスターマイン、水中花火を主体としまして約3,500発、予算にしますと1,300万円でございます。全部町の商工業者だけで、よそからのスポンサーはございません。

それから、カヌーの町づくりを進めてございます。これで3年目になりましたが、ようやく今年、当町の高等学校にもカヌークラブができて、町の職員が指導にあたり、将来国体にでも出していきたいというふうに考えております。

それから、昔、疫病や病害虫から守るということではじまっています鹿嶋流しでございますが、これも伝統行事として継続をしており、最後は雄物川を静かに流れて疫病を払うという故事に狙ったものでございます。

それから、5月頃にはうぐいが多量に上ってまいりますので、このうぐい料理で河原で賞味いただくというイベントを繰り返しております。

町としては、今現在行っているのはその程度でございますが、今ここにもご出席いただいています干曲川工事事務所長さんのアドバイスを頂きながら昨年9月に第8次治水事業5ヶ年計画の河川緑化整備事業の推薦をいただきました。今、建設省が主体になりながら河川敷あるいは霞堤部分についての工事を進めていただいております。町では完成されたあかつきには、高水敷あるいは霞堤部分を約20haでございますが、これを利用して樹林の保存ゾーン、花の広場、キャンプ場、あるいは子供の冒険の森のようなものをイメージしていきたいということと同時に淡水魚を主体としました河川博物館のようなものをイメージをしていきたい、そして川とのかかわり合いを町民の皆さんにもっていただきたいというふうに考えているところでございます。雄物川町の紹介を終わらせていただきます。宮口教授 どうもありがとうございました。花火大会あるいはうぐい料理のイベント等に加えまして、ハードな事業である河川緑化推進事業という、公的な事業も紹介いただきました。



＜新潟県^{あらかわまち}荒川町 町長 金子 好＞

新潟県の荒川町でございます。荒川町は新潟県でも北部に位置をしております、荒川の左岸側の一番下流の町でございます。農業が主体、農業の中でも稲作を中心にした農業を主体にしている町でございます。

なんといいましても、荒川のきれいな水で^{かんがい}灌漑して栽培したこしひかり、このうまいこしひかりが有名でございます。特に、新潟こしひかりの中でも「荒川米」ということで名声を博しております。

一方、私どもの町ではこの水田の裏作として球根栽培をしておりますが、この中でもクロッカスの栽培が全国一でございまして、クロッカスを中心にしたまちづくりをこれから考えていこうと準備をしております。

川との関わり合いで私が一番忘れられないのは何と申しましても昭和41年、42年の連続水害でございました。特に、昭和42年の羽越水害では私どもの町ばかりではなくて、流域の

市町村が壊滅的な打撃を受けたわけでございます。そして、一時は窮地のどん底に陥ったわけでございますけれども全国各地から本当に励ましの言葉を頂いたり、建設省、あるいは新潟県のご援助をいただきまして、立派に河川整備が進んできたということでございます。特に、私お聞きいたしますと、羽越水害というのは8月28日だったわけでございますが、その後、10月1日に現地に建設省の現場事務所を設置していただき、政府調査団、自民党の調査団の視察もお越しになられ、早急に、短期間に復旧をしていただいたというようなことが私ども印象に残っております。

この様なことで、河川整備は本当に他の河川と比較しますと、進んでいるように見受けられるわけでございます。ただ、低水護岸、あるいはまた、高水敷の整備がまだまだという現状でございます。

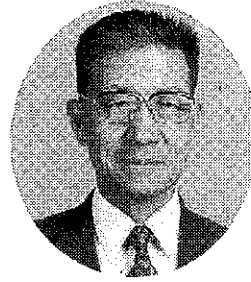
そんな関係で、3年前から河川敷にゴルフ場の計画をもちまして、いわゆるNTTのA型事業で、無利子の資金を借り受けて公共事業を取り込んだ河川敷にゴルフ場を整備いたしました。もちろん、河川敷でございますので荒川を農業等で汚してはならないというようなことで、全国にも数少ない一切農業を使わない無農薬の芝管理をしております。先般、6月の13日にグランドオープンをしており立派な芝管理ができていますようでございます。

それともう一つは、荒川の沿線のそれぞれの町村と共同で桜堤に公園を整備しようというようなことで、河口から両岸、堤防の側帯を利用させていただきまして、1万本の桜の植樹をやり、将来は桜の名所にしようということでの取り組みをいたしております。また、広大な河川敷でございますので、まだまだ相当面積の余裕もあるようでございます。これから私どもも地域住民の要望に応えながら河川公園の整備も考えていきたいとこんなつもりでおります。どうぞ一つ、先輩のそれぞれの町村の事情を参考にしながら建設省、県の皆様のご指導を頂きながら整備をしてまいりたいとこんなつもりでありますので、よろしくお願いを申しあげたいと思います。

以上でございます。

宮口教授 どうもありがとうございました。大変な水害を克服して河川整備の後、無農薬のゴルフ場を実現され、あるいはそこに桜の名所をお作りになるといった取り組みについてご紹介いただきました。どうもありがとうございました。

＜埼玉県荒川村 助役 磯田 利平＞



埼玉県の荒川村の助役でございます。

荒川村は昭和18年に白川村と中川村と両村が合併いたしまして荒川村と名づけたわけ
ございまして、平成5年の2月10日をもちまして村制施行50周年を迎える村でございます。
先ほどのビデオでご覧いただいたように荒川村は非常に山村でございます、相対的の面
積が約47km²その中の86%は山林という状態の中におかれている村でございます。従いまし
て、荒川そのものも非常に急流でございます、平地と川敷の高低差があるというふうな
ことで、平地の中に堀割を作った川というふうな形の川でございます。荒川村は南北に約
10kmくらいの村でございますけれども、そのほとんどが隣村との上流の境にある企業の発
電所を戦時中に作りしましたために、隧道で隣の秩父市までもって行ってしまった。そこに
発電所があるというような関係から夏、冬の渇水期になりますと本流に非常に水の流れが
なくなってしまうというふうな川としてはさびしい状態におかれている現状でございます
が、幸いにいたしましても支流の水が豊富でございますので、支流を利用した川利用と
いうふうなことが主体でございます、そこには小魚をおってこられるお客さんとか、あ
るいは都会からの方々が訪れる自然の宝庫というふうな形を作っている村でございます。
東京都から80km圏というふうな中におりまして、西武鉄道の乗り入れもされておりますの
で、人口6,500人程度の小さな村の中に、鉱泉ですけれども、今の温泉法で温泉として温
泉旅館として営業しておりますが、温泉旅館、民宿等のお客さん、あるいは日帰りで新緑
を求め、あるいは紅葉を求められてくるお客さん等が年間に約30万人程度訪れるという
ような村づくりでございます、以前は養蚕が秩父地方は非常に盛んでございまして、秩父
の絹織物として広く全国に名を広めていたわけでございますが、いわゆる時代の変化と申
しますか、養蚕の低迷とともに養蚕家は非常に少なくなりました。そのために、農業とし
ての生計を立てるということが非常に難しい状態の村でございます、絹織物の工場がい
わゆるハイテクの産業に変わりましたので、そちらの方へ勤めて生活をするといういわゆ
る給与所得者というような体系に変わってまいりまして、定年退職者が観光農業を主体と
した農業経営をしているというような村でございます。春の竹の子狩りから始まりまして、

芋掘、いちご、とうもろこし、ぶどう、あるいはりんごというような各種の農産物を豊富に取れましてお客さんにおいでをいただいているという形でございます。

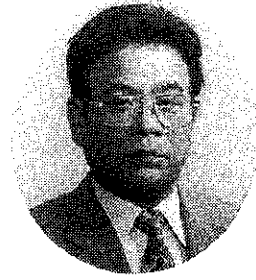
川の利用といたしまして、そうした中でもやはり、同じ荒川の名前を使っております東京都の荒川区さんは、これは子供の作文が元だということなんですが、荒川をテーマにした作文を荒川区の小学校の子供さんが書いたということから急速に発展をいたしまして、東京都の荒川区と姉妹提携をする、お年寄りのゲートボールから婦人会の方々あるいは小中学校の子供さん等全てが深い交流を結んでいるところでございまして、都市と農村とのふれあいというふうなことをテーマにしながらの村づくりを行っているところでございます。

荒川河川敷といたしましては、先ほどのお話のように河川敷と言われるほどの場所がございませんので、利用もできない、しにくいという地域でございしますが、たまたま最下流になりまして少しばかりの広場がありましたので、そこへ総合運動公園という形で運動公園の設置を平成3年度の事業で完成をしたところでございしますが、護岸等は親水型護岸ということで、水に親しみながら運動もできる憩いの場所という形でいるところでございます。

村内にただ今自慢できるということは、荒川村といたしましては、冬は雪が少ないのでスキー場はできないわけでございますけれども、天然のスケート場を作りましたが、それは気温が上がってまいりまして、天然ではスケートができなくなりましたので、人工スケートに変わったわけですが、そこは非常に子供達から学生達まで相当利用していたわけでございますけれども、そこで育てた生徒がアルベールビルのオリンピックで銅メダルを見事に獲得いたしました井上選手も私たちの村からでているわけでございます。

荒川村のスポーツ宣伝の村として宣言をいたしましてから15周年というちょうど節目の年にそうした立派な選手も誕生できたというようなことの中から、今後もそういう物を活用しながら健康な村づくり、またふれあいの村づくりということテーマとして進めていきたいと考えているところでございます。

宮口教授 どうもありがとうございました。荒川区の提携でありますとかいろいろな面をご紹介いただきました。



＜静岡県富士川町 助役 望月 六夫＞

富士川町の望月でございます。

わが町の紹介につきましては先ほどビデオで見させていただきました。大変急流の富士川に沿っている町でございます。人口は約1万8,100人という町でございます。ご存知のように富士川は最上川、球磨川と並んで日本三大急流の一つとされておるところでございます。

明治34年に町制が施行されまして、私ども富士川町は、昨年90周年を迎えたわけでございます。多彩の90周年のイベントを催したわけでございますが、そのほとんどが富士川にちなんだ、川との共生の中で色々のイベントを実施いたしました。その中で、「富士川のこれからのあるべき姿」ということでパネルディスカッションをやったわけでございますが、その基調講演が芝浦工大の高橋先生による「富士川との共生のあり方を探る」という講演の中で大変興味のあるお話がございましたので一つご紹介させていただきます。日本の中でも最も急流な川は静岡県と富山県に集中しているということです。日本周辺が一番深い湾は駿河湾と富山湾だそうでございます。陸地が急峻の中でまた、海が深いわけでございます、それだけ海に入ってから流れがあるというようなことで、急流は富山県と静岡県ということだそうでございます。

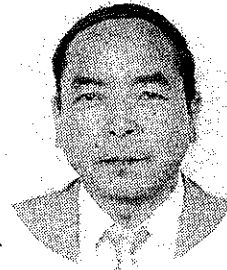
私ども先ほど申しあげましたように富士川との歴史は大変古いわけございまして、江戸時代から富士川の渡船舟運で栄えた町ございまして、昨年、申しあげましたように、90周年の記念行事のなかでは富士川の高瀬舟を原寸大で復元いたしまして、富士川とのあり方についていろいろ勉強してきたわけでございます。その中で時代にマッチしたいろいろなイベントも行われてきたわけでございますが、例えばリバーランドフェスティバルということで、カヌー、親子のカヌー教室、鱒のつかみどり、ボート遊びとか……。

それから、私たちの町は富士川の河口に面しておりますので、河口には広大な河川敷がございます。これを利用してスポーツ広場、スポーツ公園等のソフト面だけではなくて、ハード面での施設等も今、一生懸命取り組んでいるところでございます。

静岡県は「日本一の県づくり」というキャッチフレーズで、今、県土の各地域で日本一づくりに取り組んでいます。私どももこれにのりまして、「日本一の美しく見える富士川と

富士山を活かした町づくりということで、いろいろな面で富士川との共生のあり方を勉強しながら、町民こそって富士川に親しむ町づくりを推進しているところでございます。

宮口教授 どうもありがとうございました。高橋先生の講演などを含むパネルディスカッションを行われたり、川との共生について追求しておられるご紹介をいただきました。先ほども日本一の富士山の姿を見せていただきました。



＜^{おおいがわちよう}静岡県大井川町 企画財政課長 鈴木 孝治＞

静岡県の大井川町です。よろしくお願いいたします。

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と詠まわれましたその大井川の一番河口に位置しております。川と水と地域の関わりでございますが、大井川の河口には数多くの野鳥が飛来してきます。この野鳥にあやかりまして、河口の堤防に昭和62年度より野鳥の壁画を描かしていただきました。中学生から一般の方々のボランティアのもとに、現在まで延長が430m、書かれました鳥の種類ですが、100種類で1,000羽の野鳥を現在まで描いております。今までは野鳥の愛好家しか来なかった所に、一般の人達も数多く大井川の河口に訪れるようになりました。

また、南アルプスの間ノ岳にの源を發します大井川は非常に豊富で良質な水が駿河湾に向かってそそぎ込んできます。この伏流水である地下水を利用させていただきまして、町の観光協会が水の缶詰であります「蜆の泉」を製造して、イベント等の時に配布させています。これまで非常に好評でありまして、水との関わりとか、水の大切さ等を深めております。

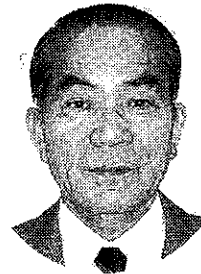
主なイベントでございますが、大井川のすぐ左岸側にちょうど港がございまして、大井川港の花火大会とか、大井川港の朝市、駿河湾・伊豆との遊覧船とか納涼船等を現在やっております。

また、一昨年から本町では日本一の地域づくり事業の一環といたしまして、人づくり事業を展開しております。人づくり事業といいましても非常に幅広いものですから、目標を水にしぼりまして水のルネサンスを起こす町、再び興すとか活かすことございまして、これをテーマにいたしまして、水を活かした人づくり事業に取り組む方向で進んでおりま

す。これにつきましても「産業面」、「文化面」、「生活環境面」の三本柱を掲げまして、イベントをつなげてこれを三本の柱をリレーイベントでやっていったらどうかということで、現在住民の皆さんが知恵を出し合っているところでございます。

本日の川サミットでいろいろと勉強させていただきまして、川、水、地域、人が一体となった地域づくりを目指していきたいと思っております。以上でございます。

宮口教授 どうもありがとうございました。特に水のルネサンスという人づくり事業に大変力を入れていらっしゃるというご紹介がありました。



きくがわちょう
〈静岡県菊川町 町長 白松 太喜夫〉

菊川町でございます。今発表されました大井川町の隣といってもいいほど近いところの町でございます。

牧之原台地という高台は、先ほども画面でご覧いただいた通りお茶一色でございまして、農産物の単品とすればおそらく屈指の額であろうと思われまます。年生産額が約80億円ぐらいと推定されています。平野部は東海道線の駅であるとか、あるいは東名のインターを中心に市街地が開けており、また水稻を中心とした農地が開けております。そのほぼ中央を菊川が北から南に流れて、小笠町と大東町を経て太平洋にそそいでおります。

かつて昭和のはじめ頃までは、この菊川は非常に災害の多い河川でございまして、ひと雨降ると沿川流域は二日も三日も水に浸ったままというような状態でもございました。開発から取り残された地域であったわけでありまますけれど、明治から大正時代にかけて、当時は村でございました流域の各村々がそれぞれ強ちに陳情を重ねていた処でもございまして、どうしても大同団結せねばということで、大正10年に全国にさきがけて改修期成同盟会を結成して陳情をいたしたわけでもございます。

先人のそうした大きな苦勞が実って、小さな川ではありますが、昭和8年には直轄改修河川に採択され、現在の一級河川につながっているという次第でもございます。その後、ご理解をいただいて改修がすすみほぼ80%~90%完了してしております。特に改修が済んで水が治まり、さらに加えて、東名のインターが開設されたことによりまして、都市化がやや急速に進んでおります。それと併行いたしまして、この川の水質も汚染が進んでいる

わけでございまして、町のシンボリックな川ではありますので、現在その汚染を取り除こうと、必死の努力をいたしておるところでございます。

まずは、菊川リバープランニング委員会を結成いたしまして、これからの事業の位置づけ等をみんなで相談することから始めているわけでございますけれども、親水公園であるとか、あるいは桜堤などの計画も含めまして計画策定を今年中くらいには進めていきたいと思っております。菊川を水質汚濁から守って、魚や水生生物の生息に適した昔の環境の良い河川にするために、行政が最善の努力をするということはもちろんでありますけれども、地域に住む住民の全ての目が川に向けられて、みんなで川を大切にしようという意識の高まりを痛感するよう、働きかけているところでございます。河川が小規模でありますので、流域の開発や住民の消費生活の状態が、即河川の水質に影響するということになりますので、みんなで努力すれば必ず早い時点で河川の浄化が進められるのではないかと、河川全線の公園化を基調として、これから開発政策を進めていきたいと考えている次第でございます。

宮口教授 どうもありがとうございました。今、お話いただいた菊川はかなり小さい川でございまして、そういう点ではめずらしい一級河川ではないかと思っております。先程の映像でもお茶が大変にクローズアップされまして、お茶の町という感じなんですけど、今は住民参加の地域づくりといえますか、川の方へ大いに目を向けていきたいというお話だったかと思えます。



＜^{しょうがわまち}富山県庄川町 町長 村井 武一＞

庄川町の村井であります。庄川町の概要につきましては、先ほどのビデオあるいは資料で紹介されておりますので省きまして、直接町の施策と水との関わり合いということを中心にして若干お話をしてみたいと思えます。

我が庄川町の活力ある町づくりの基本というのは庄川町民の持つ文化や技術、庄川町の持つ地形や風景の特性をいかに活かし、発展させるかであり、こうした基本に基づいて魅力ある活力ある町づくりの一つとして計画いたしましたのが「全町水公園化計画」であり、その公園化計画の中核施設として水記念公園を56年より合口ダム湖の湖畔の高台に地の利

を得て着手し、10年の年月と約22億7千万円の巨費を投じて竣工したものであります。この公園のシンボル施設として代表されるのが「大噴水」と「水資料館」であり、水の豊かさ水のもたらす安らぎを認知し、観光客などの来訪者にとって、魅力ある施設であると自負しているものであります。

これらの施設の特徴を簡単に申し上げますと、お祭り広場の中央にでーんと構えたのが自然水圧の利用による大噴水であり、この水源は小牧ダム湖のサージタンクより5,000 t 水槽の水圧を利用し「宇宙への旅立ち」と銘を打ったモニュメントがゆっくりと回転しながら、1.5mの上下運動に合わせて36mを一気に噴き上げているものであります。その水圧の力量感と水の神秘さに訪れる人々に賞賛を得ている象徴的な施設であると思っております。

次に、水資料館は通称「アクアアなないろ館」と称しまして、町美術館、ウッドプラザについて完成し、水の恵みに感謝する心を養い、水資源の大切さを認識し、豊かな水と緑に恵まれた庄川町の活性化を促し、庄川に関する一切の知識と親しみを資料と施設を通じて自分達のものとし、庄川とともに生きた人々の治水、利水の歴史や浸水の現状と未来の創造に胸を膨らませながら先達の碌と偉業をしのび、水は生命のもとであり文化との深いかわり合いを再認識し、清冽なる流水と水郷土館の整備などの活用を通じて、明るく水と共に生きることの楽しさ尊さ、すなわち親水の気持ちを養いながら、水の尊厳と恵みに感謝する敬水の念を涵養し、自信と誇りを持って個性豊かな文化の町づくりに資したいと水資料館を建設したものであります。その常設展示ゾーンはきこりの生活や流木の状態をジオラマや映像、照明などの手法を再現し、企画展示ゾーンは歴史的民族的な資料を中心とした展示空間であり、映像ゾーンは庄川の流れから宇宙空間までの自由な映像の組み合わせによるドラマチックなショー空間であります。

今一つ、水と生活との深い関わりについて述べてみますと、38豪雪による雪の孤島と化したあの悲惨な経験から、雪に強い町づくりを水の力を借りて水と共存することによって脱皮いたしたいと、市街地及び住宅連担区域の交通の確保と生活の安全を期するため、48年より水の町、庄川ならではの水利用による消雪装置の設置に取り組みました。河川水による消雪は水温が低く、凍ったり、あるいはゴミがつまるなどいくつもの問題が提起されましたが、一つ一つの解決の努力によりまして、今では県道を含む消雪装置の延長は36.5 km除雪計画全体の35.2%であり、消雪装置設置率は日本一であり、今ではどんな豪雪が来ても、わが町では河川水の迂回を持ちまして、なんの心配もなく、雪と親しみ、雪とともに生活をエンジョイしていける町であると町民あげて誇りといたしております。この水源

を蓄えております5,000tタンクは、消雪時以外は水記念公園の大噴水の水源として活用し、さらに消火栓として民政の安定に多大の効果を来し、さらに農業用水、生活用水不足の時にはその補給水源として緊急時の使用が可能であり、これらも地形と水を利用した庄川町においてのみ可能な施設でなかろうかと思っております。

終わりになりましたが、私は庄川のほとりに生を受け、せせらぎの子守歌に安眠をむさぼりながら、荒れ狂う怒濤の激流の宝庫におののきながら、この庄川に愛し愛されて、この今日まで生きながらえてきました。私にとって、水と川と緑を語ることは我が人生を語ることであり、庄川を語ることであります。懇々と尽きることない清浄にして豊かなうまい水の町に生を受け、行政を担当させていただいたことに誇りと喜びを感じつつ、環境の整備と水質汚濁に取り組み、みんなの力を頂きまして、庄川の流れとともに生きた先人の治水、利水の歴史と、現実の親水や未来ゾーンに胸を膨らませながら、親水と敬水の心を忘れず、水と緑の美しくたくましい人間性豊かな文化の町づくりに情熱を燃やし続けたいと念じております。

なお、発電施設や農業用水との関わりも極めて大きいものがある町でございますが、時間の都合がありますのでいずれの機会にさせていただきます、以上を持ちまして、我が町と水との関わり的一端を申し述べて、私の報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

宮川教授 どうもありがとうございました。少し端折っていただいたようで恐縮でございます。以前にも村井町長さんとは水文化の財団のシンポジウムでもご一緒したことがあるのですが、その時にも敬水ということを非常に強くおっしゃいまして、親水ということばはどこでも聞くんですが、水を敬うということを非常に信念として強調されていらっしゃいます。河川水による消雪といいますか、水の克服、そういうようなことでも画期的な成果をあげられていると思います。どうもありがとうございました。



＜愛知県とよかわし豊川市 建設部長 夏目 國重＞

豊川市建設部長の夏目でございます。それでは、豊川市の現状などをご紹介します。

豊川との関わりについて説明をさせていただきます。

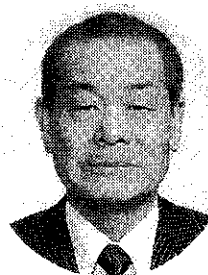
まず、治水についてでございますが、記録においては、古くからとにかく洪水で悩まされ、現在、全国的にもあまりその姿が残っていない霞堤があります。設置された時代は不明ですが、一説には江戸時代の初期には設けられ、先人たちの知恵により、洪水から生命・財産が守られてきたところでございます。明治以降においても、何度となく洪水にみまわれる中で、昭和13年に放水路の建設が内務省で計画決定され、昭和40年には完成し、現在では霞堤が無用のものとなっておりますが、これは歴史的遺産ということで保存しております。この維持管理に、今後苦慮していくものと考えています。

一方、利水におきましては、4市14町村がこの豊川の水に依存をしているところがございます。現在、上流部で建設省が第2のダムの建設を予定していますが、なかなかうまく進まないということで、非常に苦慮されているところがございます。

年間を通じて、2,200mm程度の雨が降りますが、今年度は降水量が少なく、現在第2次節水に入っており、今後20日も降らなければ水瓶が空になってしまうということがございます。このようなことから、建設省としても、ダム建設を特に望んでいる次第でありますし、下流の受益市町村でも、1日も早く建設されることを望んでいるわけでございます。

最後に河川整備についてですが、豊川市には東に豊川、中央に佐奈川、西に音羽川というように3本の地区を代表する川がございます。豊川におきましては、河川敷の利用ということで、昭和57年に建設省の都市計画決定を受け、多目的広場、ソフトボール場等の整備にあたっています。次に、市の真ん中を流れている佐奈川に、環境整備の一端として親水公園の整備に取り組んでいるところであり、音羽川については、県・市とで親水性を考慮した護岸整備を行っているところがございます。

宮口教授 どうもありがとうございました。



＜愛知県木曾川町 町長 今井 嘉文＞

愛知県木曾川町の今井嘉文でございます。まず、私どもの町の位置をご紹介申し上げます。

木曾川町は愛知県だけで考えますと、西北端の岐阜県境であります。ちょうど愛知県

と岐阜県を流れております木曾川も私どもの町の一部であります。したがって、西の方は岐阜県と接しておりますし、北、南、東、三方は一宮市と接しており、一郡一町の町で面積は約9.5km²、本当に狭い平坦地でございます。私どもの町が狭川町という名前をいただいたのがちょうど明治43年でございます。それをさかのぼること4年、明治39年に当時の黒田町と玉井村、里小牧村の1町2村が合併して、合併した当時は一番大きかった黒田町を名乗ったようではありますが、その時の記録がございませんのではっきりしたことは分かりませんが、おそらく合併の時点から名称のことはあとで考えるということではなかったかと思えます。その4年後に木曾川の名前をもらって木曾川町と命名、名前を改名いたしております。

そういうようなことで木曾川町ができたわけでございますが、個人的なことではございますが、その木曾川町の中で、特に木曾川べりに生まれて、木曾川べりに育っている、今も木曾川べりに住んでいるということで、子供の頃から木曾川で育ち、木曾川に育てられた記憶が今もよみがえってまいります。木曾川が私どもの遊び場でございます。ところが、段々水質の関係もあるでしょうし、危険性のある関係もあるでしょうが、段々木曾川には親しみにくくなってきておまして、私も寂しく思っておったところでございますが、幸い建設省の河川敷をお借りを申しあげまして、ただ今ビデオでご紹介を申しあげましたが、木曾川緑地公園は10年かかりくらいでつくったのですが、住民の憩いの場として活用をしていっていただきます。

さらにこの頃は、その河川敷きの延長上をお借りいたしまして、ちょうど私どもの県が平成6年、わかさぎ国体を行うことになっておりますので、国体のデモンストラーションの種目ではあります、グラウンドゴルフの会場に指定されました。従って、この河川敷をお借りして、今年完成したばかりでございますが、グラウンドゴルフ場を作らしていただいて、ここで平成6年のグラウンドゴルフをやらしてもらおうということで今頑張っておるところでございますけれども、残念ながら河川敷でございますので建物が作ることができません。従って、トイレ、その他を堤防の内側、いわゆる川でない方に考えなければならぬというので現在どこにしようか検討を加えておるところでございます。

さらに木曾川緑地公園にお借りいたしております河川敷は、私どもの町に接しております河川敷全体から申しますとごくわずかでございます。ほとんどのところがまだ、民有地が残っておりますので、これも将来は国と協力しながら国の力もお借りして民有地を買い上げ、さらに緑地公園を広げ、有効なものにしていかねばならないと考えている所でございます。

宮口教授 どうもありがとうございます。今お話いただきました木曾川、大変な大河でございます。信長なんかもこのあたりを治めるのに大変苦勞をしたところで、大きい川は大きいなりにいろんな問題があるんだろうと思います。



＜三重県^{みやがわ}宮川村 村長 山本泰助＞

宮川村を貫流する「みやがわ」は源を台高山脈の大台ヶ原山に発しまして、伊勢市、太平洋に至ります延長91km、流域面積920km²の一級河川でございます。古来より流域住民は宮川の恩恵に浴してきており、母なる川でございます。我々社会に自然が与えております河川の機能「利水」・「親水」・「魚族」の育成等に対し軽んずべきものでないことの再認識が必要でございます。

当村の大台ヶ原山系はその昔、伊勢神宮ご遷宮の用材を伐り出された所でもありまして、その運搬は宮川に木寄場を設け集材しまして筏を組み、筏で川を4～5日かかって下り材木を伊勢神宮まで運搬したこともありまして材木の運搬におきまして大変重要視されておりました。またその間、増水による材木流失、下流伊勢市におきましては堤防の決壊等の損害を被ったこともしばしばございました。

そういう時代は歳月の流れとともに道路整備やモータリゼーション化に因りまして今は筏下りを見ることも無くなった状態でございます。当地内の流域には宮川ダムや三瀬谷ダムが建設されておりまして、開発か自然保護かで一時期マスコミで全国を賑わしたこともありましたが、ダム建設の是非論はともかくとしまして、従来から天然遡上していました鱒、鰻、ズガニ等の遡上が皆無となったことは大きな損失でございます。電力需要激増の背景には否めないものもあるのではないかと考えております。

昔から「水のほとり」を生活拠点として深く関わりを持ってきましたが戦後の電力等経済利用のみに終始しまして、水と住民の関り方を軽視してきた嫌いがありましたが、近年急にその見直しがなされてきましたことは住環境を守ることから良い傾向となっております。

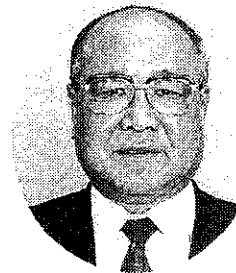
建設省がまとめた'91年の「全国1級河川の水質現況」によりますと、109水系の中で宮川のB. O. D (Biochemical Oxygen Demand : 生物化学的酸素要求量) が0.4と清流と

して第1位であることが新聞報道されました。また8月のアサヒグラフでは「伊勢・深山の秘瀑」というタイトルで大台ヶ原の宮川源流が紹介されましてまさに全国1の清流を誇っております。

世界3大文明は全て河川のほとりから発祥している史実からみましても今後は残存河川流域を見直すと共に、ダム湖面を含めました利活用を推進したいと考えております。「川」に対する認識と意識の高揚を図りつつ、永遠の清流を目標にしまして啓蒙、啓発を推進していくことが、環境保全の一端としましても重要かつ肝要でありまして、流域利活用により地域の活性化を図っていくべきかと思っております。

最後に第1回の本サミット開催に当たりまして、絶大なるご尽力を頂きました庄川町の皆様方に感謝と敬意を表する次第でございます。以上でございます。

宮口教授 どうもありがとうございました。宮川は全国水質がきれいであること等、現在の河川利用等についてお話しいただきました。



<兵庫県^{かこがわし}加古川市 助役 野村 昇>

加古川市の野村でございます。まず、加古川市は兵庫県南部に位置しまして、本年7月1日現在で人口が24万5,531人で、面積は138.46km²でございます。兵庫県下21市70町ありますが、その中で人口では6番目の都市でございます。加古川は播磨^{はりま}の国風土記において紹介をされております鹿兒の河川に由来をいたしてございまして、県下最大かつ最長の大河でございます。加古川市はその名の通り、市地域を二分して流れる大河加古川の恩恵を受けまして発展をし、今日に至っておるわけでございます。

加古川市の地勢は市内の最高峰が標高304mで、ほとんどが平野部で2mから30mの段丘平野が広がっており、河口付近は沖積層となっております。古くは、災害が極めて多くあったわけでございますが、最近では河川改修や加古川大堰の完成によりまして、大きな災害は発生をいたしておりません。

加古川大堰は治水と利水の両面から総合的に水をコントロールすることを目的といたしまして、昭和55年に着工し、総事業費400億円を費やしまして、昭和63年建設省直轄工事で完成をしたものでございます。

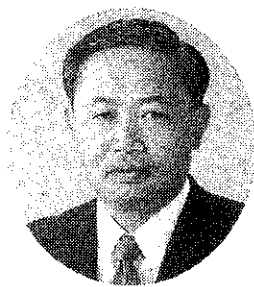
利水としては、農業用水、工業用水、そして上水道用水の安定的確保が図られまして、また、水面を利用したレガッタ等、親水面からの利用も行われるようになっております。そして市内を流れる、加古川の本流の長さが南北16km、河川敷が478haございまして、地域の3.4%を占めているということでございますから、この土地を有効に利用していきたいということから加古川河川敷公園を計画をいたしまして、緑の河畔回廊計画ということで、6つのゾーン分けをいたしております。「浜辺の魚釣りゾーン」、「親水河原ゾーン」、「市民健康ゾーン」、「水と緑のシンボルゾーン」、「四季の自然散策ゾーン」、「加古川ゲートゾーン」と、6つにわけまして計画をいたしております。現在の所、「河川敷公園」、「運動施設ゾーン」として35.2haを供用をいたしております。将来は高水敷が165haございますのでこれを順次に整備をお願いしていきたいということで考えておるしだいでございます。

そして、加古川の歴史は古く、弥生時代の集落の遺跡も加古川の兩岸にございまして、古墳群も市内に点在いたしております。そして、奈良時代には市内を古代山陽道が通りまして、街道最大の^{うまや}駅の^{うまや}加古の駅が設置をされまして、江戸時代には山陽道の宿場町として、また加古川を利用した高瀬舟による舟運も発達をし、加古川交通の要衝の地として栄えて参ったわけでございます。明治時代以降、近代産業は加古川の水を利用した毛織物、それと肥料、そういうのが栄えたわけでございます。戦後、高度成長時代には播磨臨海工業地帯の整備促進政策によりまして、昭和39年工業整備特別地域の指定を受けまして、臨海部の埋立と、工業用水道の建設によりまして、鉄鋼を中心とする製鉄所の立地進出によりまして、宅地開発にともなう人口急増やら、商業施設の集積など、東播磨の中核都市としての変貌を遂げてまいったわけでございます。現在、加古川市では加古川市総合計画において、「人間性豊かな心ふれあうまちづくり」を目標に掲げ、21世紀の本市のあるべき姿として「未来を開く清流躍動都市加古川」を目指しております。

そして、母なる加古川を中心として市民がともに働き、住み、憩うことができる魅力ある町づくりに市民、事業者、行政が一体となって努力いたしているところでございます。そして、水を利用したイベント等につきましてはビデオでも紹介がございました、加古川レガッタで加古川大堰の水面を利用して一昨年より開催されており、昨年は参加校18大学、600人ほどの参加で、観戦者は3,000名ぐらいでございました。そして、加古川マラソン大会、ハーフマラソンということで、3km、5km、10kmと、ハーフコースを実施いたしており、参加者は年々増加して、昨年は1,775名の参加を得て、これからも続けてまいりたいと思っております。そして、最大のイベントは加古川祭りで、昭和28年に第1回の川祭り

ということで開催をしたわけでございます。清流加古川の恩恵に対して感謝と水難者への慰霊の意味を含めて開催されたわけでございます。川祭りの第20回目にあたる昭和47年に加古川祭りとして改称いたしまして、イベントを数多く増やしていったわけでございます。市役所前広場を中心とし、また、各9つある公民館エリアにおける催し物など、全市民あげての一大イベントとなっております。また河川敷における花火大会や手作りカヌー大会なども行われています。

宮口教授 どうもありがとうございました。加古川市では、加古川を利用したイベントが全市民をあげて行われていることが発表されました。



兵庫県揖保川町 町長 八木 捷之

私ども揖保川町は兵庫県の南西部に位置しておりまして、東が姫路市、西は相生、赤穂市に接しております。そして、面積は23.48km²、人口は1万2,500余りの町でございます。ちょうど一級河川揖保川が町の東を沿って流れているということでございまして、昭和26年に3村が合併いたしました時に、揖保川を名前にいただくということで揖保川町として誕生いたしました。

現在、私どもの町は、神戸へ約50分、大阪へも1時間20分ほどの通勤距離になってまいっております関係上、ベッドタウンとして、どんどん人口が増えているというところでございます。

揖保川町は旧江戸時代の旧山陽道の宿場町として栄えてまいりまして、現在もJR山陽本線、国道2号線、さらに山陽新幹線、山陽自動車道、そういったものがすべて横断している町でございます。そして、揖保川の水は酸化鉄が少く、薄口醤油を造ることに適した水であるということで古来から薄口醤油の本場としてまた、揖保川の清流を利用して、素麺が特産品として育ってまいっております。ですから揖保川の恩恵を受けた特産品として醤油と素麺があげられます。

ただ、揖保川の場合は川底といいますか河床が高くて、川の水が高くなると逆流して入ってきます関係上、さっきも紹介の中でもありましたように、特に昭和51年の9月災害に約4日間で870mmという大雨が降りまして、全町の約1/3ほどが浸かったということで、

いわゆる揖保川との戦いの歴史でもございました。現在は、排水機場が建設されまして、揖保川の水が増えましたときには樋門を降ろしまして、ポンプを2基すえておりますが、1秒あたり10m³、10tの水を逆に排水できるようになっています。そういったことで治水を行っております。ただ、将来的には20t排水という計画になっておりますので、私どもはその都度、毎年建設省にも陳情を繰り返して、あと2基増設して4基にさせていただきたいというのが現状でございます。

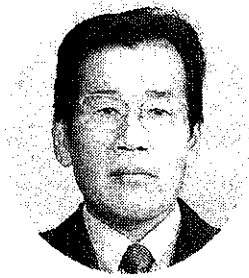
なお、揖保川は播磨工業地帯の中心的な場所にもあります関係で、今も映像を見させていただきましたように、川の水が本当に他方に比べまして特にきれいなわけではなくて、非常に汚れてきているというのが現状ですので、今、2市5町で流域下水道工事を1,300億円の計画でやっております。揖保川町も来年の4月からは、やっと一部供用開始をいたします。下水道をどんどんこれから進めて、揖保川をきれいな川にしたいと、努力しているところでございます。

なお、今年、特に「花と緑の街づくり」というものを一つの表題に掲げて、今、基本方針を固めているところでございまして、特に、揖保川の堤防は、春に菜の花が一面にきれいに咲くわけでございますが、これを一つのメインといたしまして、川の堤防を取り込んだ「菜の花いっぱい街」を一つの柱にした、「花の街づくり」というものにも取り組んでいきたいと考えているところでございます。特に、西播磨テクノポリスといたしまして、私どものところから30kmほど上流に世界で一番最大級の放射光施設が平成10年に完成いたします。それに伴いテクノはできますが、ポリスは周辺の町でそれぞれ考えてくれと、こういったことではございますので、ちょうど周辺の4市10町でそれぞれの町の特徴づくりといえますか、そういうものに向けて全力をあげているところでございまして、川を取り込んだ街づくりも一緒に、これを機会に考えていきたいなと、このように考えております。

また、1ヶ月後には私どもの議会の常任委員会が、ご当地庄川町に視察を兼ねてお世話になるようではございますので、この機会にこういったサミットによりまして交流の場が広がっていけばよいのではと、このように考えております。

宮口教授 下水道についてずいぶん力を入れておられるというお話を伺うことができました。

＜徳島県那賀川町 助役 福島 聡＞



四国徳島から参りました福島でございます。

徳島県はこの8月12日から徳島市一円に阿波踊りがございます。大変全国的に名を売っている阿波踊りでございます。それがもう近く始まるころでございます。その徳島市から約20km南東部に位置する那賀川町でございます。昭和31年に旧今津村と平島村が合併いたしましたして、そしてこの母なる川、那賀川の名称をいただきまして、那賀川町として発足したわけでございます。人口は約1万余りで、面積が19.19km²でございます。そうした中で、農業と木工業の盛んな町で、住民人口の約6割が農業に従事している穀倉地帯でございます。特に那賀川町は、この那賀川の下流に位置しております関係上、山一つないというのが特に那賀川町の特徴でございます。それと、徳島県は一級河川が2つあります。まず、大きい川といたしまして、吉野川、それと那賀川町でございますが、全国の河川の紹介を聞かせていただきますと、この河川に愛称があるというのは、わが徳島県だけでないだろうかとおもいます。その例を申し上げますと、吉野川は「四国三郎」という愛称を持っております。そして、わが那賀川町は「阿波の八郎」という愛称を持っているのでございます。なぜ阿波の八郎と名称がついたかと申しますと、那賀町の上流から下流まで1市7町にまたがり流域が広がっていますのでその八をとりまして、阿波の八郎ということでございます。この八は皆様方もご存知のように末広がり、大変由緒あるこの八の字を使わしていただいたわけでございます。

当那賀川は水利用に大きな変化をきたしたわけでございます。その理由を申し上げますと、昭和20年頃に南海大地震と申しまして、紀伊水道を含めた地域に大きな地震があり、地盤が沈下いたしました。わが那賀川町もこの母なる川の伏流水をいただきまして、自然の井戸が満潮時になりますと、大変冷たい水が吹き出て、水には大変恵まれていたわけでございますが、今申しました地盤沈下で塩水が浸食してきたということでございます。私の町の対岸に阿南市という人口約6万ぐらいの町がございます。臨海部でございますので、多数の工場が進出し、そして、その中で特にこの那賀川の伏流水を使った揚水型企业が進出してきたわけでございます。国際パルプ、神崎製紙、四国電力、こういった水を主に使う

企業が進出が特徴でございます。そこで徳島県といたしましても、工業用水道を引かなければならないというので、この阿南市の南岸に工業用水道の取水口をつくった。また、下流に遮水壁を作り、那賀川の形状を人的に変更しましたところ、今まで大変恵まれていました那賀川町が次第に塩水化され、そして昭和40年頃に今まで豊富な水が、上水道を引かなければ飲料水に使えないというような実情に陥ったわけでございます。

那賀川町は那賀川の上流が山間部でございます、杉、桧という銘木に恵まれて、製材、製函、建具のこういうような木工業の事業が栄えまして、昭和20年代には交付税の無交付団体という財政的にも大変恵まれた町でございます。その後、建具、木製品が、外国の外材、またアルミサッシ等に圧されまして、自然に木工業が衰退していったわけでございます。

こうした中でこの那賀川の水利用につきまして、徳島県当局が色々検討いたしまして、治水、利水両面にわたる多目的ダムを5箇所作ったわけでございます。しかしながら、そのダムの一部が構造上問題がありまして、多くの土砂が堆積いたしまして、清流がこのダムのために水が濁ってきたということで、環境団体等から反対運動等がでてきまして徳島県もやむをえず堆積を除去するような手続きをとっているわけでございます。

次にイベント地域活性化でございますが、毎年この名称にちなみまして、「阿波の八郎祭り」と申しまして、「ヤッタロウ21」という民間団体がございまして、この団体が毎年8月に色々イベントを行っているわけでございます。例えて申しますと、800mの巻き寿司を参加者全員が巻いてあとで食事をする。また、作家の藤本義一さんをご招待いたしまして、たこあげ大会をやり、藤本義一さんも風雨舞うという立派なたこをあげていただいたわけでございます。

また、河川敷等の利用についても今後充分検討して、河川敷公園、またゲートボール場等といろんなものを作りましてこれら地域の活性化に尽くしていきたいと思っております。

宮口教授 どうもありがとうございました。町活性化に色々イベントを通して尽くしておられることがよくわかりました。

ひじがわちょう
〈愛媛県肱川町 町長 大野 和〉



愛媛県肱川町でございます。川の名前は先ほどのビデオにもありました肱を曲げたように大きく方向を変えながら流れておる川でございます、その辺からつけられた名前であろうと思っております。

高知県境あたりの水を集めまして、伊予灘へ運んでおります川で、幹線流路103kmでございます。私の町はその川のちょうど中間あたりにあります。そしてまた、18年に合併しましたときには四国で2番目といわれておりました広い町の制定をいたしましたので、川の名前をもらって町の名前としたわけでございます。

肱川は支線が475あるといわれておりまして、支線の数では全国5位というようでございます。私の町もまた、小さな河川で分断させておりますので、こちらの山とは違いまして、景観が非常に変化がありまして眺めがいいというふうに思っています。

川と人間の生活の関わりにつきましては、私が色々申し上げるまでもないわけでございます。私の祖父の日記には、舟にこたつを積んで誰それと川を下ったというようなことが書いてあったり、大正時代に5.60km奥に入った山の中ですけれども、運漕業という職業分類がございます。そういうことでいろんな役割を果たしてきたわけでございますが、道路交通時代になりまして川の役割も変わってまいりました。しかし、大正時代から水力発電が始まりまして、現在も3つあるわけでございますが、また肱川は水害が多い訳でございます、戦後まもなく取り組みがされまして、ダムが作られておりますが、これによってまた、多目的な機能を果たしているわけでございます。そして、また第2のダムがまた作られようとしており、去る3月31日に受け入れ表明をしたばかりでございます。

このような町と水との関わりでございますが、非常に時代がどんどん進んでまいりますので、遅れまいという気持ちで、あせりや不安があるということで、私の町では新しい町創造ということを目指して、計画を立てて、自分達で立てた計画をやっていけばいいんだというふうな考え方でやっているわけなんでございますが、「風おこし運動」というのを始めております。庄川も風が有名でございますが、わたくしの風おこし運動というのは、町おこし運動というのでは大変平凡だということで、だからなんかないかと

ということで風おこし運動というのを始めております。そういうことで、まず心の中に風をおこせということではじめたわけですが、その風が自然の風に関心が移り、また自然エネルギーに関心がどんどん進んでいるというふうなことでございます。新しい町創造計画で個性づくりを一つの目標にいたしております。「花や温泉」、「ダム」こういった個性があるわけですが、それに自然エネルギーの町というのを個性にしたいということで、風博物館でありますとか、小さい河川を利用した発電、太陽、こういったことに取り組んでいきたいというふうに思っております。

我々は、自然の恩恵を受けて生きているわけですが、自然の掌の上で生かされているわけですので、川よ永遠にという思いを忘れてはいけないと思っております。水道も本流から300mほど押し上げて、給水をいたしておるといような状況でございまずし、先ほど申しました消火栓の利用、そしてまたダムによる町づくり、こういったことを目標にやっている状況でございます。以上で終わります。

宮口教授 どうもありがとうございました。一通りお話をいただきました所で、やはり時間がなくなってしまいましたわけですが、もう数分位はお許しいただけるのではないかと思いますので、市町村長さん方でこのことを一言だけやっぱりいっておきたい、皆さん方の話を今一通り聞かれました、このことだけはやはり言わせろということがございましたら、ほんの一言という形でおっしゃっていただけたらと思いますが。どなたかお手を上げいただければ幸いです。端折っていただいておりますが、こんなことを言うともまた失礼かもしれないんですが。

それでは一応、これが第1回の川サミットということでございますので、今回はいろいろ盛り沢山の内容で、事務局の方も、これが本当のサミットなんだろうけれども、そのものにそんなに時間がとれなかったということもあろうかと思えます。是非2回目からのサミットにおきましては、また、いろんなテーマをとりあげられまして、十分な市町村長さん方の発言の機会をお作りいただければというふうに思っています。

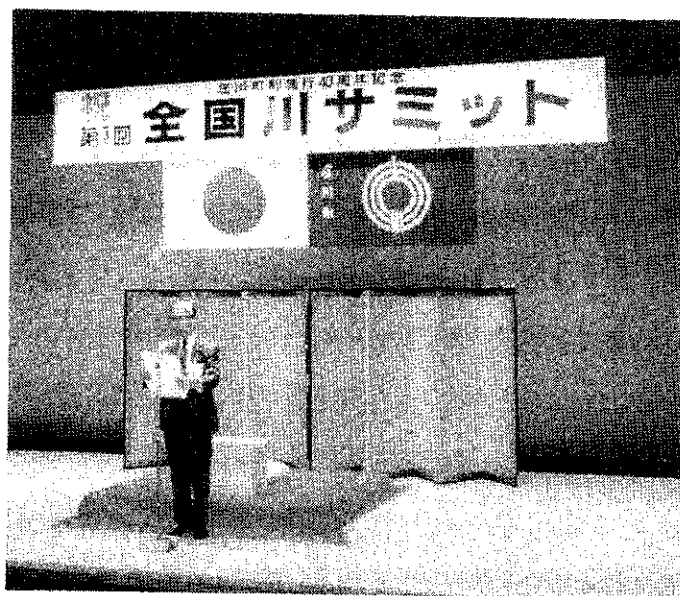
本日は本当にいろんな種類の、堂々たる大河、木曾川や富士川や大井川、あるいはこの庄川のような大河をはじめといたしまして、比較的私どもにも余りなじみがありません、小さな川だけ大変洪水に悩み、一級河川としていろんな手当を受けておられたというような川も含めまして、いろんな種類の一級河川の名前を冠しておられます市町村の方が、今はもうお帰りになられた方もありますけれど、全員お集まりいただきまして、第1回の川サミットをおやりになったわけでございます。今、素晴らしい取り組みでございまずと

か、川というものと正面切ってこうやって付き合っているということがたくさん紹介されました。大変な洪水の歴史のことも紹介されたと思います。この日本ほど長期的にわたって川と、しかも継続的に社会全体が取り組んできたというような国は世界に例がないであろうと思われま。日本の国土そのものを作ったのも川であるといってもよいと思いますし、いろんな体制でありますとか、政治の変化を経てもなおかつ、川というものと地域社会が取り組んできた長い長い歴史があるということがいえるかと思ひます。そういう川というものを共通の基盤としてお持ちになっておられます市町村、あるいはそれ全体でなくても、町村長さん同士がまた個人的にお付き合いをいただく。あるいはいろんなレベルの交流というものをお作りになって学び合うということなど是非そういうことをおやりいただければと思ひます。

やはり、これが発展する大都市に対して個性ある発展を地域社会が特に地方の地域社会が目指していくそういう姿を是非作っていただければというふうに思ひます。

そういうわけで、本日の川サミット並びにシンポジウムは大変意義があったのではないかと思ひます。本日はどうもありがとうございました。

それではこれからお集まりいただきました市町村の代表者の方々がこの川サミットの宣言文をまとめられますのでシンポジウムは、これで終了とします。



▲ 第1回全国川サミット宣言

資 料 編

目 次

1. 記念講談

－ 巴川物語 －

講談師 田辺 チビ鶴

2. 「全国川サミット宣言」宣言文

3. 「第1回全国川サミット」in 庄川町現地視察コース

4. 写真で綴る「第1回全国川サミット」in 庄川町

第一回 全国川サミット記念講談

田辺チビ鶴公演

一級河川の名を自治体名にいただく15市町村

巴川物語



講談師

田辺 チビ鶴

本名 山村健一。昭和53年生まれ。
静岡市南中学2年生。
父親であるタレント小林実さんと
田辺一鶴師匠の手ほどきを受け、
幼い頃から庶民芸能である講談を中
心に新しい感覚で、芸能の広い世界
を自ら作り上げていこうと努力を続
けている。

演目「春日の局」「太閤と曾呂利」
「フランス物語」「巴川物語」など。

本日は第1回全国川サミットの開催おめでとうございます。あのオヒゲでおなじみ田辺一鶴一門、田辺チビ鶴でございます。どうぞよろしくお願い致します。

清らかに、豊かな水の理想郷 — 。

本日は「全国川サミット」にご参集下さりご苦労さま、そしてありがとうございます。

全国には実に沢山の川があります。そして川を中心に文化を形づくり、社会の発展を見せて参りました。

全国各地の一級河川を名に頂く自治体・15の市町村が一堂に会し交流し、川とその流域との関わりや21世紀へ向けて、よりよい川との共生の方法を探り、全国へ向けて、川へのより一層の理解を深めると共に、その啓蒙、普及を図ることを目的としたサミットとうかがっております。

まずは「川サミット」の開催、まことにありがとうございます。

本日お集りの市町村、まず北は北海道から

- ① 一級河川「^{むかわ}鵲川」が町の中心を貫き、肥沃な土地に恵まれ、その河川敷利用も「たんぼぼ公園」を整備。町民に憩いと安らぎを与えて親しまれている ——

北海道は、鵲川町!!

- ② 1. 河川公園構想、2. カヌーで町おこし、3. 花火まつり、4. 鹿嶋流し、5. クリーンアップ作戦 — と、河川と共に産業と文化が育かれたことを感謝し、どこまでも川にこだわった町づくりを推進しているのは ——

秋田県・雄物川川町!!

- ③ 荒川水系にあり、農業と漁業が盛んなこの町は、伝統芸能・お神楽、獅子舞いでも知られる ——

新潟県・荒川町!!

- ④ 江戸時代、山から伐り出した材木を荒川に落とし、筏に組んで下流の消費地へと流し、村人はこれにより生活の糧を得ていた。そんな歴史的背景のあることを忘れずに、中川村と白川村が昭和18年に合併した折、新町名を流れる川からもらった ——

埼玉県・荒川村!!

続いては、私の住む静岡県から三つ

- ⑤ 日本三大急流の一つとしても名高い富士川は、江戸時代から舟運が始められ、生活必需品や人が交流する手段として川が盛んに利用され、繁栄したことから名付けたという ——

静岡県・富士川町!!

静岡県の皆さんには大変かわいがっていただいておりますが、テレビ、ラジオ、寄席以外で一番最初に私の講談を実演で聞いて下さったのも、この富士川町の方々でした。

- ⑥ 昭和30年に町村合併し、住民から一般公募で町名を決めた大井川町。

新しい町の地域性を最も端的に表現、全国的にも知られやすく、かつ簡潔な^{あざ}字であるという理由からだそうです。

「箱根八里は馬でも越すが、越すにこされぬ大井川」と歌われた ——

静岡県・大井川町!!

ここには内も親戚があります。ここで採れた梨は水分を沢山含んだとてもおいしい梨で、毎年時期になると頂きます。また、大井川の伏流水で作られたお醤油も、母が好んで利用するおいしいお醤油です。一寸ひいき目に長くなってしまいました。

そして今一つ静岡県を

- ⑦ 古くは町の周辺は牛馬の放牧地だったという。近年、水質の汚濁、河川構造のコンクリート化等による住民の川離れ現象を何とかしようと、事業施策の展開を考える「菊川リバープランニング」を策定。着々と準備中という ——

静岡県・菊川町!!

- ⑧ 豊川は古来から氾濫が多かった所です。そこで霞堤という特殊な堤防がありました。今もその名残があるが、それよりも、現在は河川敷緑地整備を積極的に推進している — 又、豊川稲荷でも有名な ——

愛知県・豊川市!!

- ⑨ 美しい郷土の象徴でもあり、木曾川フィズという、おいしい水の代名詞にもなっている ——

愛知県は木曾川水系の木曾川町!!

- ⑩ 川を中心に、両岸に集落を形成しているところから、両岸を結ぶ橋が8つ、又多雨地帯であるためダムが3ヶ所に作られている ——

三重県・宮川村!!

- ⑪ 河川を、市民が憩える親水空間として整備するため「加古川河川敷緑地整備事業」などを進め、レガッタ、ブラックバス釣り大会などのイベントも開催し大成功の ——

兵庫県・加古川市!!

- ⑫ 揖保川下流域に生活の場を定めた人々は、この川の作り出す恵みを長い間受けて栄えて来たことから、清流の名を町名に頂きました ——

兵庫県は、揖保川町!!

- ⑬ 那賀川を利用して運ばれた材木を材料に作られる木工品の町として古くから知られるが ——

徳島県・那賀川町!!

- ⑭ あたかも人間の肱のごとく曲がりくねって、その美しさを誇るところから命名された。肱川水系の ——

愛媛県・肱川町!!

- ⑮ そして、本日の「川サミット」のホストである、この富山県庄川町。

古来、庄川の豊かな水によって水田の発達、また、流水利用の材木流送による木工業の興隆、昭和初期の電源開発が進められ電源としても大いなる役割を果たしたことから「庄川町」と名付けたそうです。

私の住む静岡には^{ともえがわ}巴川という川があります。その巴川の流域快適環境づくり協議と、静岡県中部振興センターの依頼で読んだ作品です。

では聞いて下さい。「巴川物語」です。

ともえがわ!!

今日も巴川は静岡から清水へ、そして清水港へと休むことなく穏やかに流れています。(こうゆう所はゆっくりやると、川の穏やかな流れの感じが出ますが、ナガレテイマスと早くしゃべると急流になって舟が転覆してしまいます)

巴川は静岡の人にとりましても、清水の人にとりましても、なくてはならない生活の動脈のようなもの、まさに、私たちの命を守ってくれる血管と同じでございます。

静岡の中心部の県庁や駿府公園に降った雨も、清水銀座や、清水次郎長の墓に降った雨も、みーんな一緒になって巴川に入り、清水港に注ぐのでございますが、この川のまわりに住んでいる人は今や、なんと34万人にも及ぶと伺いますから、静岡、清水を合わせた全人口の半分近い人々が、巴川と深く関わりながら生活しているといえるのでございます。

ところが、こんな大切な川であるはずの巴川が……ああどうしたことでしょう……皆様の心が川から離れてしまったためなのか？ それとも、油断をして川のことを忘れていたためなのか？ 巴川は県下「汚くて臭い川」になってしまったのでございます。

川を「汚くて臭い川」のままにしておくのは、人間の身体を流れる血管の内側に脂肪がたまり、血管が細くなってしまふ動脈硬化という恐ろしい病気をそのままにしておくことと同じでございます。これでは、まことに川がかわいそうではありませんか！

血管に脂肪が溜まった人のことを専門用語で難しくいうと、けっかん人間というんです。直ぐに市役所に届けを出して下さい。しばう届といってすぐにあの世へ旅が出来ます。(これは冗談ですが) 早いうちに巴川を回復させなければ大変なんです。

そこで皆様の願いを込めまして、新作講談「巴川物語」を一席申しあげます。

「巴川に架かっている橋を覚えたよ」

「へえ、全部か」

「うん、はしからはしまでだ」

この巴川という名前、とても素敵ですので、どうしてついたのか調べて見ますと、もっともらしい説が、いくつかあるようですが、その一つに「沼のばあさん」伝説に由来しているものがなかなか面白いようでございます。

その昔、今の静岡市の北部、龍爪山りゅうそうざんの麓あさばたぬまに浅畑沼と呼ばれている底なし沼がございました。

時は建武2年と申しますから、今から670年程前、新田義貞と足利尊氏の軍勢が安倍川のほとりの手越河原で合戦をしたところでございます。

新田義貞の弟、義助が、駿河の守護役としてご当地へやって参りました。そして、瀬名の豪族・瀬名十郎忠本の美しい娘小菊と、想思相愛の仲となり、二人は結ばれたのですが、（このチビ鶴もクラスの女の子で好きな子がおりますが、どうやらこれが片想いのようで……。想思相愛となるコツなどをどなたか教えて下さる方はおられませんでしょうか……。物語の二人は結ばれたのですが）まもなく義助は鎌倉へ出陣して討死。残された小菊は義助の忘れ形見「こよし」という女の子を生んだ3日後に不運にもこの世を去ってしまったのでございます。

幼くして両親を失ったこよしは、小菊の母である祖母の「秋野」に、それはもう大切に大切に育てられ、はや18才。

講談って、テンポが早いのでとってもナウイ芸なんです。

時は1351年7月。60才となった祖母の秋野が、病の床についてしまいました。

世間一般では美しい花にはトゲがあると申しますが、このこよしは美しい上に、気立てのほうも優しい娘でございますから、大恩あるお婆さんの病気の回復を願って、毎日のように浅間神社へお参りに通ったのでございます。

浅間神社へ行くためには、浅畑沼のほとりを通らなければなりません。ところが、この浅畑沼には、いたずらずきのカッパが住んでいて、ある日こよしは沼の中に引きづり込まれてしまったのでございます。あわれ、こよしは、二度と水面にあがって来ることはございませんでした。

さあ、この事件を下男の急報で知った秋野は、

「にっくきカッパを退治してくれよう」

と、自分の病のことも忘れ、これまた靈験あらたかな浅間神社へとお願いに参ったのでございます。

「にっくきカッパめを神様の御利益をもちまして退治させてくださいませ。何とぞ、何とぞ、このばばめを蛇にしてくださいとう存じます。カッパを見事、退治させていただきましたあかつきには、この浅畑沼を守る龍神となり、お礼をさせていただきますとう存じます」

「それは殊勝な心がけじゃ、聞き届けてつかわそう！ ところでお前はどんな蛇が好みじゃな」

「なるべく大きな蛇がよろしいかと存じます」

「それではヘビー級じゃな」

（洒落しやれのわかる神様がおられたものでございます。）

秋野は、大きな蛇に変身し、

「なにとぞ、浅間神社のご加護をもちまして、孫よしのかたき、にっくきカッパを退治させたまえ」

「エーイ!! ドッポーン」

「なにお、こしゃくなこのばばめ、返り討ちにしてくれるわ」

ブァーっと沼の水が盛り上がったかと思いきや、ザザザーと、水しぶきが立ち上がり、カッパが姿を現わしたのでございます。

さあ、へびとカッパの壮絶な戦いが、いつ果てるともなく繰り広げられ、戦いの結果はもちろん、へびがカッパを退治することが出来たのでございます。

この時、沼の水は大きな巴模様を描き、大きな渦となり、そのまま川となって流れ出したことから誰いうとなく「巴川」という名前がついたと言い伝えられているのでございます。

時はくだりまして、慶長16年と申しますから、1601年、徳川家康の命により初めて江尻に橋がかけられることとなり、土地の老夫婦が選ばれ橋の渡り初め式が行われようとしていました。

すると、大勢の見物人の人垣の中を、子供の姿形をした、得体の知れない者が突然現れ、橋の東の方角から西へと、チョコチョコッと渡ったと思いきや、そのまま静岡の方向へとスーッと消えてしまったのでございます。

カッパに男女の区別があるかどうか知りませんが、今、この稚児橋には男の子と女の子のカッパの小さな可愛らしい銅像が四体おかれてございます。まだ、ごらんいなっていらっしやらないお方は、ドーゾ、ドーゾ、ドーゾーごゆっくりごらんいただき、この物語に思いをさせてみていかがなものでございましょうか？

「稚児橋にある河童の像に時々お賽銭をあげる人がいるんだけど、後でみる行くと無くなっているんだって」

「誰かがカッパらったんだらう」

なーんて言ってる人がいますが、おさい銭をカッパらってはいけません。

「あとでたたりがありますぞーッ」

ところで、この巴川、戦国時代の武将たちとも深く関わり合いをもって参りました。

武田信玄ゆかりの江尻城は今の江尻小学校の場所にございましたし、今川の吉川城きつかわじょうなど数々のお城は、つわものたちの夢の跡なのでございましょうか？

慶長年間、家康公は江戸から駿府へご隠居されることとなり、駿府城を大修復、巴川を

城の中までつなぐ大規模な工事をなされたのでございます。

そして西国の諸大名から献上されたお城修復のために使う大きな石を、清水港から船に積み込み、駿府城まで運ぶ水路といたしました。

運ぶ途中、船から誤って巴川に「ストーン」と落としてしまった石は、(石だからストーンです。)長い間、巴川の川底にそのまま沈んでおりましたが、そのうちの3つが、明治27年、現在の巴川製紙工場建設のおり掘り出され、いま巴川製紙会社の門柱となっているのでございます。ですから巴川製紙のあの立派な門柱は、あの立派な門柱は拾ったものなんです。

巴川を水路として利用し、運んだものは石ばかりではございません。全国各地から集められた年貢米やら、いろんな物を府中静岡に運ぶためにも、巴川は大きな役割を果たしてきたのでございます。

当時をしのぶよすがとして「甲州廻米置き場」という立派な石碑が、今でもドーンと巴川の河口に立っているのが、何よりの証拠でございます。

大正時代に移りますと、今の清水氏の有度、高部、飯田の村々で、瓦づくりが盛んに行われるようになりました。現在ではほんの数軒しか残っていないそうですが、その出来あがった瓦の運搬にも、巴川はひんぱんに利用されました。昭和の初め、今の静岡市の千代田村には、瓦運搬用の般が、なんと146隻もあったと、記録に残っているほどでございます。

こんなに沢山の瓦を運んだ巴川ではありますが、巴川には大井川や富士川にあるような小石混じりの河原のほうは昔から、まったくございません。こういうのを変わらないなんて申します。

このように、巴川はいつの時代にも、まわりの人々と共に歴史を刻んで参りました大切な川であったのに、今はすっかり汚れ果てて「こんな汚い川なんて見たくない！」ということなのではないでしょうか？ 巴川に面した家々は、いずれも巴川に背中を向けて建てられているといった有様が、こんにちの兩岸の風景でございます。

こんな巴川の今の姿を家康公を初め、巴川にゆかりの人々がごらんになったら、どんなにか嘆き、悲しまれることございましょう。

家康公は、駿府の町や江戸の町づくり、つまり現在でいう都市計画づくりといった、偉業の数々をなすとげられたことは、知る人ぞ知る歴史上の事実でございまして「富山の庄川を見習うのじゃ、川を決して汚してはならない!! また、物やゴミを川へ捨てた者には、厳しい罰を加える。」とおふれを出し、川の保護に努めたとの記録が残っているのでご

ざいます。川の怖さ、大切さがわかっている。「さすがに家康公だな」とチビ鶴改めて尊敬し直しているのをございます。

しかし、今は「川を汚した人をきびしく罰する」ということもありませんので、市民の皆様お一人お一人が「川を大切にしよう、巴川をきれいにしよう」と考え、運動の輪（運動の輪!!）を広げていくしか手立てはありません。

はっ? 「運動の輪」をみんなでやりたい? ならやりましょう。よろしいですか、行きますよ。うんどうの「輪」!! よく出来ました。三重丸ーッ!

昨年秋には、斉藤県知事さんや市長さんが「巴川をきれいにする運動」を進めるため、自ら小船に乗って陣頭指揮にあられたそうで大変ありがたいことをございます。

チビ鶴、少し生意気なことを言わせていただきますと、川の汚れの80%は、皆様の家庭からの排水が原因となっているようで、もっと科学的にお話しますと……ほんの小匙5分の1杯、つまり1ccの油を台所から流したとしますと……魚が住める位のきれいな川の水、専門用語を使いますと、BOD5ミリグラムパーリットルにもどすためには、何と、ドラム缶1本と申しますから200リットルもの水が必要なのでございます。

（皆さん、今のBOD5ミリグラムパーリットルっておわかりですか? 皆でやってみましょう。私が言いますからあとについてやって下さい。（会場言う）おそいですね。（会場全体）早すぎますヨ。（会場）皆さんやけくそですね。）

コーヒーをカップに半分流してしまった場合（ドラム缶で2本分、日本酒を一合流してしまった時）、何とドラム缶で36本分の水が必要だということですから、ただもう驚いてしまうばかりでございます。

そこで、これからチビ鶴が皆様にお願ひ申しあげます5つの約束を、心に止めていただき「巴川の水をきれいにする運動」を、皆さん自身の問題として、今日からさっそく考えて頂き、取り組んでいただきたいと存じます。

第1番目のお約束は、お皿やお鍋についた油や煮汁は新聞紙などで拭き取ってから洗って欲しいということです。

第2番目のお約束は、せっけんや洗剤などは、使いすぎに注意し、使っても少しだけに欲しいということです。

第3番目のお約束は、油類は流さないで、古新聞や布切れに扱わせたり、凝固剤などで固めてからゴミとして出して欲しいということです。

第4番目のお約束は、台所では目の細かな三角コーナーや、水切り袋などを使って、小さな茶がらや野菜くずなど流さないようにして欲しいことです。

（「静岡県は川の多い県として知られているんだけど、主な川をあげてみな」

「大井川、富士川、天竜川、安倍川、それに巴川だな」

「まだあるよ。今川に徳川。それにミカンの皮だ」

なんて言って、ミカンの皮を川へ捨てては困ります。）

そこで第5番目のお約束は、川にゴミやあきかんなどを捨てないでほしいということです。

第6番目のお約束……あっ、これはありません。

今日、チビ鶴の講談を聞いてくださいました皆様方が、この「巴川の水をきれいにする運動」のリーダーとなって、運動の輪を大きく大きく広げていってくださいますことを声を大にしてお願いする次第でございます。

そして、皆さん一人ひとりの気配りの結果、やがて、川は昔のように「きれいで美しい川」へと再びよみがえり、泳いだり、魚釣りをしたり、シジミをとったり、また川に屋形船を浮かべ、風情を楽しんだりすることもできるような、それはそれはすばらしい川へと生まれ変わることができることでしょう。

いつの日か、きれいになった巴川、よみがえった巴川の水辺に、タイムトンネルに乗って、ゆかりの深い家康公に来てもらったら、キッとキッと、いや必ずや「皆さんありがとう」と、ナミダを流して喜んでいただけることではございましょう。

最後に、今日のこの講談の「巴川」というのを皆さんのふるさとの川に置きかえて考えていただき、川をいつまでもいつまでもきれいに保ち昔から今に至るまで私たちに与えてくれた「恵み」に感謝したものと申しあげて、この「巴川物語」の一席を終らせて頂きます。

ありがとうございました。

「第1回 全国川サミット宣言」宣言文

川は豊かな自然を育み、心をなごませる潤いのある水辺空間を創り出し、流域の人々の生活に必要不可欠な水を提供するとともに、人々の日々の生活の場として、舟運・漁業の場として、ときには祭りや遊びの場として利用されてきた。一方、川はひとたび洪水が起ると家屋の浸水、田畑の冠水等人々に多大の被害をもたらしてきた。このように川は人々に恩恵と苦渋の両面を与えてきたが、その流域に暮らす人々の生活の根源となり、流域の自然や人々の暮らしと一体となって、その流域の歴史・文化・風土の形成に大きな役割を果たしてきた。

ここに会した1級河川を名にする全国15の市町村は、このような川との結びつきが特に大きなところであり、21世紀に向けた個性豊かな活力ある地域の発展のためには、地域のシンボルとなっている川と一体となった地域づくりを積極的に進めていくことが重要と認識したところである。

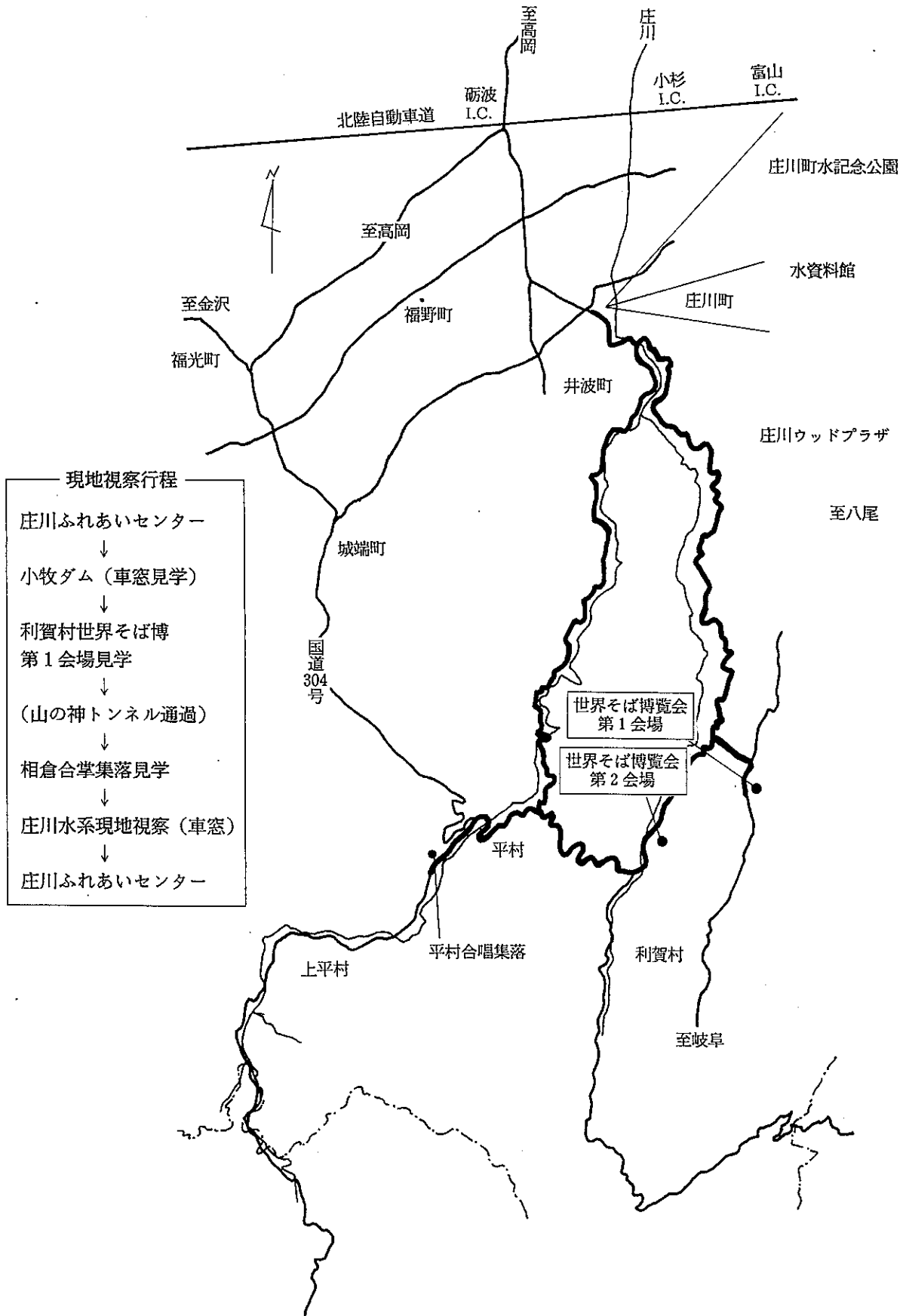
そのためには、今後とも15市町村が一堂に集まり交流を深めることにより、川とよりよい共生を図った地域発展のあり方について、お互いの認識を深めるとともに、この成果を全国に向けてPRすることにより国民の川に対する理解を深め、川を活用した個性豊かな地域づくりに貢献することを、ここに宣言する。

平成4年8月8日

第1回全国川サミットin庄川町参加者一同

代表 富山県庄川町長 村 井 武 一

第1回全国川サミットin庄川町 現地視察コース



写真で綴る第1回全国川サミットin庄川町



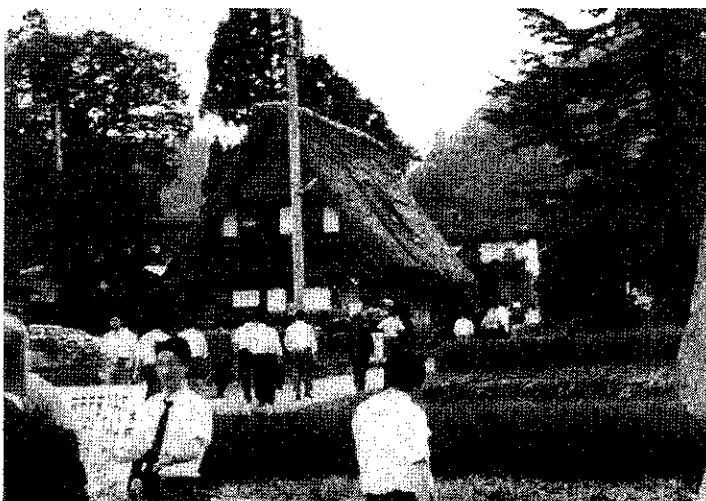
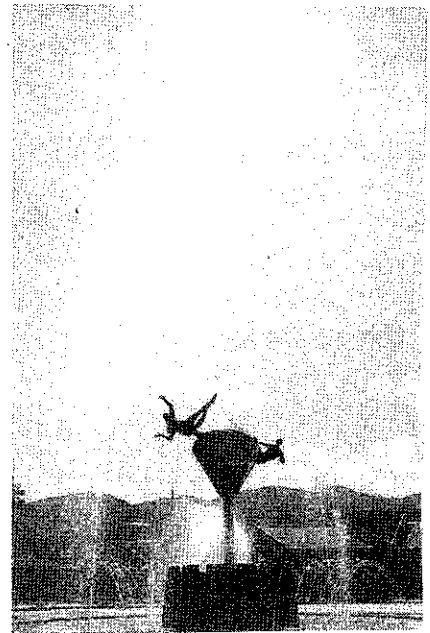
▲ 第1回全国川サミットin庄川町参加パネリスト

◇ 8月7日（金）〈庄川水系現地視察〉



▲ 庄川町水資料館見学

▼ 庄川町水記念公園噴水

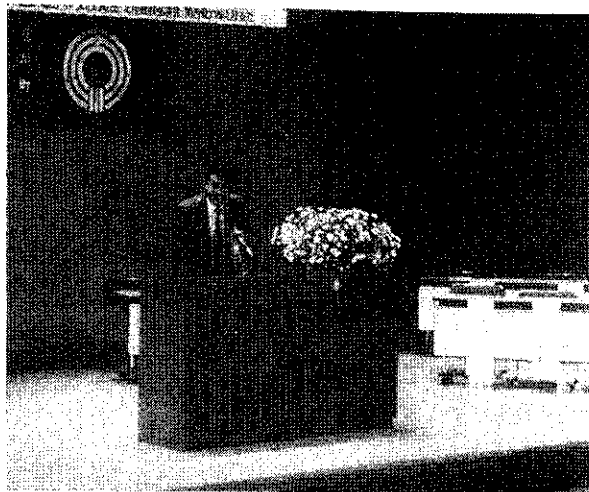


▲ 平村相倉合掌集落見学

◇8月8日(土) 第2部～第4部



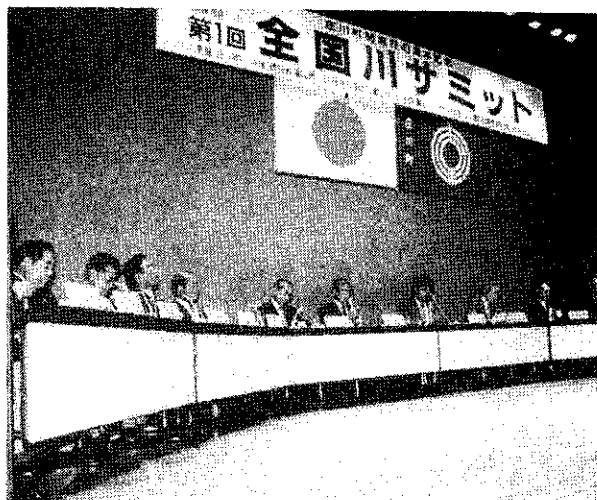
▲ 意見交換会 (第2部)



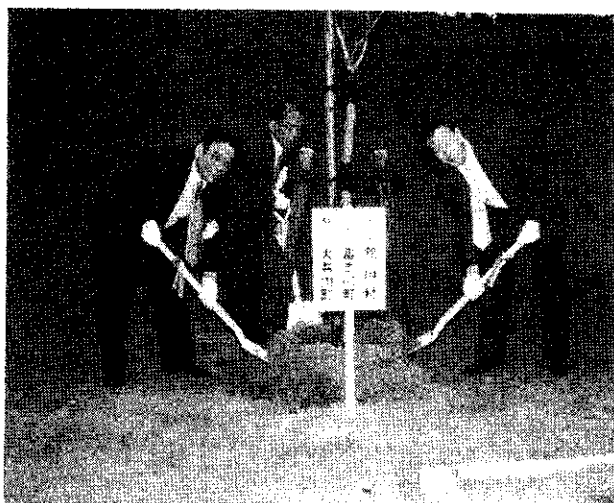
▲ 記念講演 建設省 河川局長 岩井國臣 氏



▲ 記念講演を聞く参加者



▲ 川とくらしのシンポジウム (第3部)



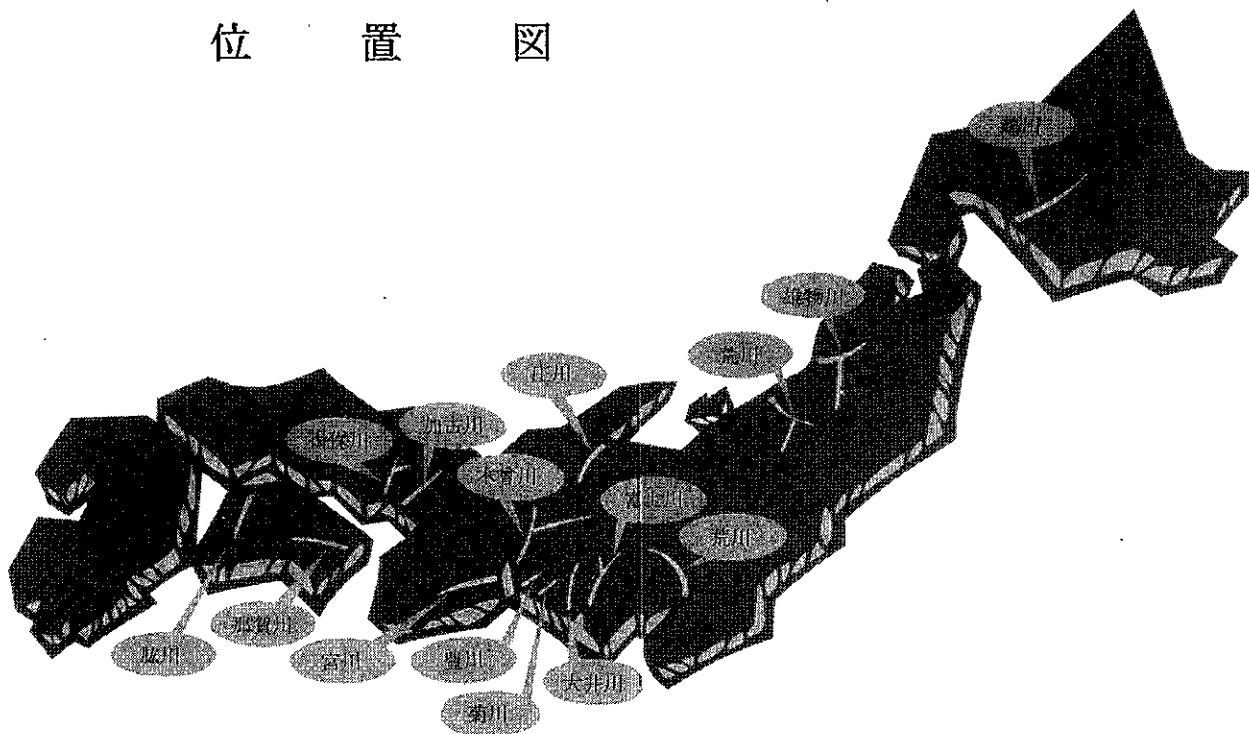
▲ 記念植樹 (第4部)



▲ 交流パーティー (第4部)

第1回全国川サミット参加15市町村

位 置 図



「第1回全国川サミットin庄川町」事務局

富 山 県 庄 川 町

富山県東砺波郡庄川町青島 401番地 (〒932-03)

TEL (0763) 82-1901(代) (内線145~147)

FAX (0763) 82-3521(代)

編集・構成 富山県庄川町企画室

